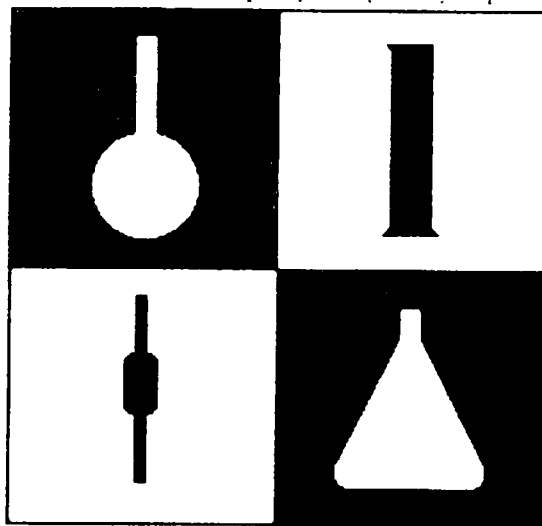
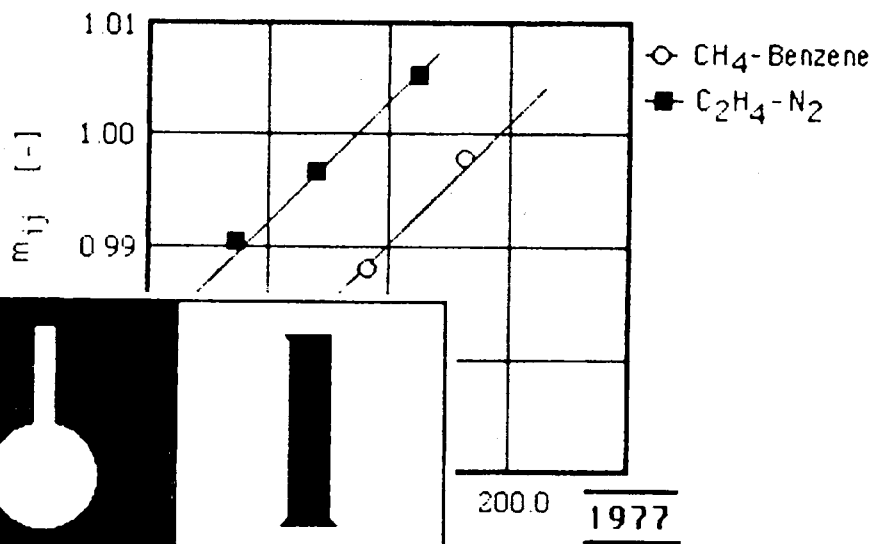
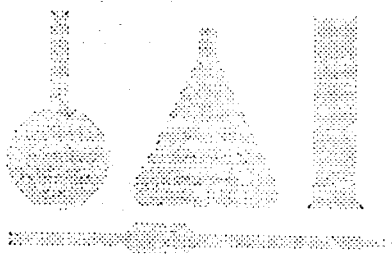


10周年

# 西海ゼミ



1986



Copy by Kondoh and Satoh  
with Mac plus. Mar. 27 '87

## ゼミから研究室へ

西海英雄

通路とでも呼んだ方がふさわしい薄暗い空間の片隅に机を置いただけではあったが、ともかく始めなくてはならなかった。丁度10年前、昭和52年の4月である。この時受け持った11人の4年生が第1回のゼミ生である。奉職して2年後カナダに留学する機会を得、Alberta大学のRobinson教授の研究室で20カ月を過ごすことができた。それまで外国の文献を読んではいても自分自身の意識も活動範囲も日本に限られていた。それが留学を機会として国際的な視野を持って研究を進める事が出来るようになり、ゼミにも国際的な部分を反映したいと思うようになった。

昭和56年4月に戻ってからしばらくして問題の薄暗い空間に廊下を通すことになり、それを機会に現在見られるような明るい部屋割りが完成した。やっと研究を旨とする雰囲気を整ったのがこの昭和57年度第5回ゼミ生からであろう。昭和60年度には卒論が必修化し、我が研究室に初めての大学院生が入った。今年度(昭和61年度)は機械工学科の卒論前刷り集の作成、卒論発表会が新たに開催され、院生は3人となった。佐藤耕一先生にもご指導頂き、充実した研究室活動を行なうことができるようになった。10月始めにはCassano氏(INTEC:アルゼンチン)を工学部に招き学生に講演をしてもらった。高圧気液平衡測定装置も完成した。卒論・修論を従来の演習問題的趣きから創造性を競う方向に向けること、すなわち西海ゼミから西海研究室へ衣替えすることが現時点での課題である。

このような研究室の充実も大切であるが、前々から卒業生に対するサービスが気にかかっていた。ここ数年、首都圏在住の卒業生が忘年会を開いてくれる。その席で研究室開室十周年を記念して何か行ないたいかと計ったのが一昨年の暮れであった。その場では昭和61年11月23日に工学祭に合わせて記念祝賀会を行なうことが決められた。いざ具体的に計画を立てる時になって気が変わった。そう度々行なうことができないのだから地方に散った卒業生が参加できるような記念祝賀会を行ないたい。三浦荘で泊まり掛けの計画がこうして生まれた。住所録の発行は寄付金を基に増補されて文集となり皆さんにこうしてお届けできることになった。寄付金の残りはパーソナル・コンピュータPC9801V X2を購入する資金の一部に当てられ後輩の役に立っている。詳しい報告は後で記すとして皆様のご協力で研究室開室十周年行事が無事終了したことを御礼申し上げる。

この文集を編集するに当たり各代より1名を選び原稿を依頼した。原稿の集まりは捗々しくないが、ともかく入手できた原稿に加えて、近況、卒論テーマ一覧、住所録の他、佐藤先生、妻智恵子、娘奈穂子から原稿を頂いた。感謝の意を表したい。それでも原稿が足りないので、私の書いた一般記事の中からゼミに関係の有りそうな4編を加えた。

十周年は何とか終わったが、肝心なこれからの展望がない。この激変する社会の中で研究室が貴兄の寄り所の一つとなるにはどうしたらいいのだろうか。お考えを聞かせていただきたいと思う次第である。

(昭和62年3月吉日 記)

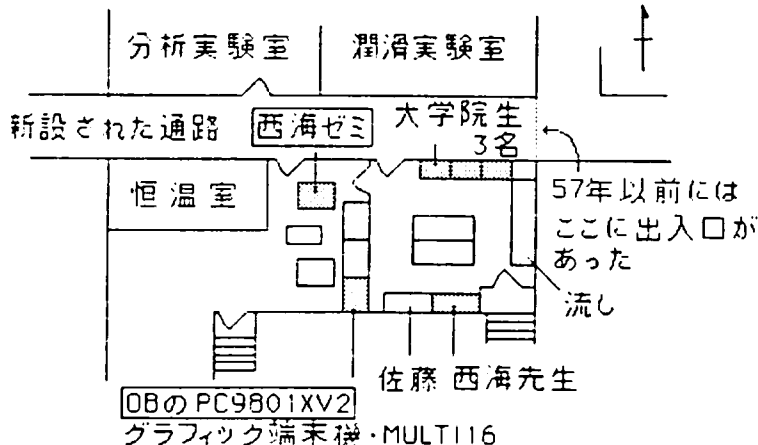
## 西海先生への提案

化学教室 佐藤 耕一

西海先生が仙台よりはるばる上京して10年、この春で西海ゼミも9回目のゼミ生（2年間のエドモントンでの研学生活があるので）を送り出す事となりました。57年夏の実験室の改築後は、私も先生と机を並べている関係で西海ゼミの学生とはより密着した付き合いをしてきています。ところで、西海ゼミの卒業生で記憶に残っている人達を思いうかべてみると、おもしろいもので1回目のゼミの人達が第一にうかんできます。当時、化学のゼミに来る学生は成績が悪く（本当にひどかった）他のゼミから回されてきた学生がほとんどでしたが、先生も若く（現在も若いと抗議が先生よりありそうですが...）はりきっていたので学生も乗せられて、いつも大声で話をしながら卒論をやっていたのを覚えています。ところで、彼らが卒論の中でBWR状態方程式のデータの入力を初めて行い、これが化学として大型計算機(ACOS)を本格的に使い始めた記念すべき年となったのでした（現在はFACOMに換わり、ほとんどの卒論でコンピュータを使っている）。この一回目のゼミ生には、いつもニコニコしている笑顔の似合う菊池君、ビールピンをマイクがわりに演歌を歌わせたら一流の前田君、ジャガイモボーイ（失礼）の降矢君そして音なしの構えの吉田君（先日の会に出席してくれて、ありがとう）など特色のある人ばかりで、この伝統は現在でも受け継がれているようです。しかし、この数年西海ゼミを第一希望とする学生がでてきたり、成績も優秀な学生が来たりしてこの伝統もあやしくなっています。先生としては「おもしろくない傾向」だと思っているようで、私もこの点同感です。私の考えでは、西海ゼミの魅力はなんといっても雑多な性格の学生がワイワイと集まり、そしてお互いに影響し合っていくところに有るのであって、均一な学生が集まってはおもしろくないのです。

そこで、西海先生に私からの提案です、「もっと1,2年生の授業を厳しくして、西海ゼミだけは行きたくないという風潮を作り上げましょう」。さて特色ある西海ゼミ卒業生の皆さん、この提案をどう思いますか...

(おまけ) 現在の化学機械実験室



## 幸 わ せ マ ン

西海 智恵子

まずは、ゼミ開設10周年お日出とうございます。

この10年いや20年彼の生活態度はまるで変化なし。学校に11時間滞在するというのが学生時代からのモットーだが、時に12時間から13時間になる事もまれではない。帰宅するのは10時から11時。たまに「気が狂いそうだ」等と思いつめたような顔をして扉を開ける時もあるが、大抵は機嫌が良く、着替えが終わると「酒を出せ」と叫ぶ。休肝日を設ける努力も数回繰り返したが、今だに定着しない。酒を飲むために生きているのか？ 生きているから飲むのか？ 良く学び、良く遊び、好きなだけ仕事をして好きなだけ飲む。幸せを絵に画いたような人だがそろそろ年齢の事を考えないといけませんなあ。

## 10 周 年

西海 奈穂子

わたしには10周年がとくに記念するべき日なのかわかりませんが、10周年記念おめでとう。

わたしはその時、受験のさいちゅうだったので、三浦半島に行くという事だけでもとても楽しみにしていました。それ以上に実際三浦半島に行って泊まった時は楽しかったです。行く前までは「人数が少ない」「もう1泊したい」等と言ってはいましたが、やっぱり1泊であの位の方が良かったです。

これからはお父さんはもっとはやくかえって、ゼミ生または卒業生の皆さんは、がんばって下さい。

(小六)

## カナダには着いたが

西海英雄

日本からの飛行機は10時間かかって昼の12時近くにバンクーバー国際空港に着きました。まず入国管理です。若い女性の係官は無言でわれわれ親子3人のパスポートをゆっくり見てから“Can you speak English?”と質問をはじめました。いろいろと聞かれて最後に“Welcome to Canada”と言われたときにはホッとしました。いよいよ初めてのカナダです。空港内で日本円をカナダドルに換えます。トラベラーズチェックとして多少日本から持っては来ましたが、チップだとかタクシー代に現金が要ると旅行案内書に書いてあったからです。

食欲はありませんがとにかく何か軽い物でも食べなくてはと軽食堂をのぞいてみます。カフェテリア形式で、でき上っているサラダとかサンドイッチ、コーヒーなどを自分で選んで行き、最後にお金を払うようです。睡眠不足で食欲のないのもさることながら問題はチップです。ともかく人々の後に尾いて行きジュースやコーヒーをお盆にのせレジで今換えたカナダドルを払います。クォーター(¢25)、ダイム(¢10)、ニクル(¢5)、ペニー(¢1)などの硬貨にも親しんでいないので確認するのに時間がかかります。おつりの教え方も引き算でなく足し算なのでどうもピンときません。座って飲んでいますが、目は周りのテーブルに行っています。いろいろな人種がいて、しかも耳慣れない英語をしゃべっているのが珍しいですが、真の目的はその人達がチップをあげるのか、あげないのかを知ることにあります。その結果、この程度のレストランではチップを置く必要がないことがわかりました。

つぎは14時55分発のエドモントン行きの塔乗手続きです。私の応答ぶりが心配だったのか若い係員は切符を入れた袋にゲート番号と数字を書いてくれました。数字は塔乗開始の時間のようです。とうとう英語しか通用しない所へ来てしまったのです。待合室の椅子によりかかり目をつぶると疲労がどっと出て来るのが感じられました。

カナディアンロッキーを越えてプレーリー(大平原)のエドモントンに行く1時間半の空の旅で疲労からか5才になったばかりの奈穂子は耳が痛い泣くばかりで途方に暮れたのが辛く思い出されます。

山が切れた大平原が雲の間に見え隠れするようになりやがてエドモントン国際空港へ無事着陸しました。国際空港とは言え原野の中にある小じんまりした空港です。ロビンソン教授が出迎えてくれました。彼とはハワイの学会で一度会っていたのですぐわかりました。決して背は高くありませんがガッシリとした体つきの英国風紳士でもうすぐ還暦というのに我々の重いスーツケースを軽々と抱え彼のステーション

ウォンゴンへ運んでいきます。奈穂子の耳の痛みもウソのように直り、車は明るい草原の中の道を走っていきます。周りは原野や牧場で穀物を貯蔵する巨大なエレベーターが何基も立っていたり、石油の精油所が畑の中にキラキラ光っていたりします。夏の盛りというのに暑くなく高原特有の爽やかさが渡ってきます。15分も走ったでしょうか、夕立の雲が去った青空を背景に蜃気楼のような高層建築のビル群が地平線に浮び上がってきました。エドモントンのダウンタウンだと説明してくれます。前にも日本人が彼の下で働いていたとかで易しい英語でゆっくりとはっきりとわかるようにしゃべってくれるので助かります。あとになって女房がひどい英語でよくまああししゃべれるものねと非難と感嘆を混じえて語っていました。

やがて建物が道路に沿って建ち並ぶ街に入ってきました。人口50万余を有する北米最北の都会エドモントンです。何しろ土地に余裕のあるカナダのことで道路も家並もゆったりとしています。頼んでおいた宿舎は学校(Univ. of Alberta)の寄宿舎の一室で、夕飯はロビンソンが大学のFaculty Clubでご馳走してくれました。日本ではデザートといえば大抵果物またはアイスクリームですが、ここでは主にケーキやパイそれも甘く大きなものが出てきます。周りの人々は食事のあと、それをバクつくのです。所変れば品変ると言いますがこれには驚きました。この女性は食事を作る手間と台所が汚れるのを嫌うので、食事は肉とカンヅメ野菜の粗末なものとなり最後に甘い物でも詰め込まないと食べた気がしないのではないかと後になって聞き、そうかもしれないと思いました。

別れ際、“We would like to take a rest”と言いました。すると彼はギョッとしたように聞き返しました。私はrestのつもりでしたが彼にはrestと聞えたのでしょう。RとLの発音では生活に慣れてからも時に不愉快な思いをさせられたものです。

部屋に入ると閉めてあったカーテンがまぶしい。外灯でもあるのかと見るとそうではなくてまだ陽が沈まないのです。夜の10時というのにまだま昼のよう。北緯53°では白夜にはなりませんが、日本にいたときと比べると何と夏の昼間の長いこと。日本を発ってからエドモントンの一室で眠れるまでの40時間に渡る長い一日はやっと終わったのです。

翌日からの1週間は充分寝ているはずなのに起きても頭の芯が痛むつらい時差ボケの日が続きました。時に研究室の人々の助けを借りながら、銀行で口座を設け、アパートを決め、中古車を見に行き、車の保険に入り、車を買ひ、電話を開設し、TVのケーブルを申込み、新聞の配達を依頼し、医療保険に入

り、船荷を受け取るために税関にそして運送会社へ行き、中古の家具やTVを買うために何度も見に行き、在留届を出し、ダウンタウンにバスで行き、などと夢中だったとはいえ今思うとよくまあこんなにたくさんを1週間でできたものと驚かされます。と書くとあたかもスラスラと順調に運んだようですが事実は大違い。船荷が着くことになっているバンクーバーの運送会社へ電話をかけても話がわからず追加のコインの音ばかり空しく響くこともありました。しかし周りに日本人が居ないということの良いことで下手な英語が全く気になりません。

日本からの船荷が届き、子供が Day Care Center (私立の保育園) へ行きはじめ、そろそろ遊びにでも行って見るかという一段落の状態になったのが日本を発って3週間というところ。車を買ってから国際免許証で運転していましたがどうも受けが悪く不愉快な思いをさせられることがありました。度々自分の身分証明 (I. D.) となるものを見せるよう請求されますが、車の運転免許証 (現地の) と有名なクレジットカードが普通です。この2種類がないと一人前扱いしてくれないことがわかったので、車の免許をとりました。

この間、最大の障壁は何といっても会話力が不十分なことから来る不自由さでした。用件が通じたとしても感覚的にピタッとこないで、翻訳コンピュータのような味気なさが残ります。通常、英会話ができるとか、できないとか技術的なことを言うけれど1つの単語はそれなりの歴史や習慣が込められていて話す者同志が暗黙の了解の下に会話を交していることをいやというほど感じさせられたのもこの頃です。話すときは自分の知っている言葉を用いるので相手にとって奇異に感じられることはあっても、意志はかなり通じます。これに比べ決定的なのは聞く力です。特に日本人は自国でその必要がないので惨めな思いをさせられるようです。そういった状態の時に生活を始める上で重要なことをわずか数週間の間に終了しなくてはならないのですから大変なことです。

私の会話力は行く前の数カ月間、週に1時間外人に個人指導してもらっただけで自分でさえも上手だとは思いませんでした。それでも生活するためにやもう得ず英語とつき合っているうちにつぎのことを気づきました。相手の言うことがわかったと思ったときは話の内容の大事な1語 (One word) がわかったときだということを。カナダでは幼稚園 (Kindergarten) は公立の小学校に付随しています。ある人がそこに入学許可をもらいに行ったとき校長が出て来て長いことしゃべっていましたが全く聞きとれませんでした。その着いたばかりの日本人にできることは時々うなずくことだけでした。しかし最後

に O. K. の言葉を聞いて大丈夫だとわかったという話を聞いたことがあります。はじめのうちの会話は万事そんなものようです。

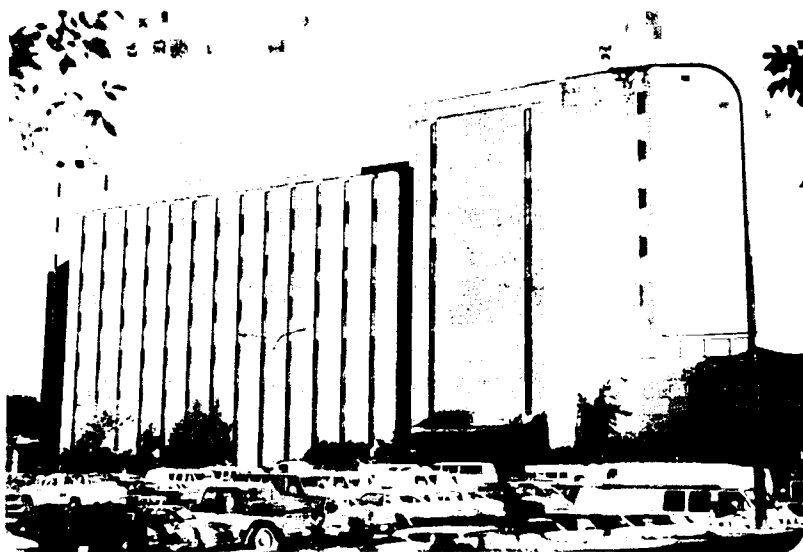
現地で生活していると、値切ったり、釣り銭のトラブルが生じたり、品物の説明を要したり、車を買ったり、保険に入ったり、アパートを借りる時の契約書の説明をしてもらうなどと複雑な場合が生じてきます。このようなとき会話力以上に大切なのはトラブルに対する処し方にあるようです。あいまいな笑いを浮べてしようがないと損をする必要はありません。疑問が生じたり、違っていると思ったら必ずはっきりと主張することです。相手が何か言って聞きとれないとき "Pardon?" と尋ね返すのは何度しても失礼ではありません。しかし知らない単語を何回言われてもわかる訳はありません。one word を捕えたならかなり核心に近いし、ただの推測でもいいですから自分の言葉で "Did you say...?" とせつぱつまりながら確認の言葉を投げかけてみます。すると Yes とか No とか言ってきます。相手が自分のペースにのってくればかなり満足ゆく解決が期待できる可能性が生じてきます。

基本的な生活はこの程度の会話力で足りることが多いので数カ月で英語に対する向上心を失い、あとはひたすら自分の研究生活に流され今年3月末、20カ月ぶりに帰国したわけですが、それでも時々英字新聞が斜めに読め、TVのコメディを皆と一緒に笑えたらなあと思うことはありましたが、すでに道遠しの観が先で、努力する気は一瞬にして失せてしまうのでした。アルバータ大学に入学したい全ての外国人は TOEFL で 600 点以上を取らなければなりません。この水準は相当高く一般のカナダ人がそれだけ取れるかどうか疑問だと言う人がいるほどです。この難関を突破してここで学ぶ日本人が何人かいますがそれでも授業についていくのは大変で修士の課程を終えるには3年かかるのが普通だとのこと。言葉は文化のバロメータと言えるでしょうが、直線ではなく文化の程度が上ると共に急激に高度の語学力が要求されるようです。逆にろくに英語のできない人々 (私もその一員なのですが) が楽しく外国生活を送れるのは衣食住といった基本的な生活は文化の水準から考えると低位にあるからなのではないでしょうか。留学していた先輩に外国生活の印象を尋ねると英語はわからなかったけれど楽しかったよと答が返って来るのでした。英語がわからなくてどうして楽しい生活を送れるのか、その度に疑問に思ったものです。しかし今回帰国して同じ質問を受けると、同じように「いやあ英語がわからなくてね。アッハッハ」と答えるのです。

法政大学工学部ニュース 1981年

University  
of  
Alberta

左端が  
Department  
of  
Chemical  
Engineering



1979. 8

1981. 3

D. B. Robinson

ご夫妻と



# International Meetings on Phase Equilibrium Data (パリ, 1985) に参加して

西海 英雄\*

9月5日より13日までの8日間におなつて相平衡データに関する国際会議が陽光爽やかなパリにおいて行われた。会場のパリ大学都市はパリ市の南端に位置し、パリを取り巻く幅の広い(多分、片側3車線であったと思う)外周環状大通りに接し、高速地下鉄 R.E.R. の駅 (Cite Universtaire) をはさむモンスーリ庭園と共に緑濃い地域を形づくっている。ここは第一次大戦後に設立され、現在27の各国館、10のフランス直轄館を有し、それぞれ留学生を収容している。その中には日本館もあり、お城風の背の高い堂々たる建物を入ると藤田嗣治画伯の描く数匹の馬と犬が玄関正面に迎えてくれる。

国際会議はその中心的な建築物である劇場(現在はレストランも兼ねている)で行われた。写真1の正面2階の奥が会議場で、古い天井からはシャン

テリアが吊り下り、華麗な彫刻がほどこされた300人は収容できそうな部屋でスライドとOHPを使用して発表が行われた。一部の発表と委員会は別室で行われた。

写真2の前列右側の大きな人が大会委員長の H. V. Kehiaian 教授(第VIIパリ大学 CNRS)である。会議の前日にこられた東洋エンジニアリングの武内氏によると、Kehiaian 教授はスタッフを陣頭指揮し自ら掲示板に日程表を貼ったりして大忙しであったとのこと。アルメニア生れの氏は苦勞人で押しの強い反面、マイナーな存在であるわれわれ東洋人や東欧の人々にはいろいろと気を使ってくれた。

SRK 式の Soave 氏がこられなくなり、その代役として筆者が座長を務めることのできたのも思いがけないことであった。



写真1 会場(パリ大学都市)



文末に写真掲載

写真2 前列左より Sandller 教授(Delaware 大学)、Kehiaian 教授、後列左よりスタッフの1人、筆者

\* 法政大学工学部機械工学科



表1 発表件数

会議番号	1	2	3	計
講演	32	39	58	129
レポート	2	10	4	16
トピック	5	14	3	22
ポスター	13	14	47	74
委員会	11	5	2	18
デモンストレーション		18		18

この国際会議はつぎの3つの会議より成る：

1. The Second International IUPAC Workshop on Vapor-Liquid Equilibria in 1-Alkanol+n-Alkane Mixtures

(5-7 September 1985)

2. The First CODATA Symposium on Chemical Thermodynamic and Thermophysical Properties Databases

(9-10 September 1985)

3. The Second CODATA Symposium on Phase Equilibria in Multicomponent Systems (11-13 September 1985)

一つはIUPAC, 残りはCODATAの主催で第VIIパリ大学のInstitute de Topologie et de Dynamique des Systems (ITODYS)によって運営された。

参加者は毎回200名弱, 発表件数を表1に示す。講演は1人15~20分, スライド, OHPを使用し終了すると直ちに質疑応答することもあるし, セッション毎に行うこともあり, やり方は座長にまかされているようである。英語あるいはフランス語を用いることを除いては日本の学会と同じで, 討議は活発であるが質問する人がほぼきまっているというのも日本と同じであった。ただヨーロッパでの国際会議であるせいか訛の強い英語が多く, 馴れているはずのFredenslund教授でさえ, Vidal氏のフランス語かと思うと英語のフレーズが続くといった難解な質問を, 壇上で注意力を集中して聞いていたのが印象深く思い出される。この他, 参加国が日本(2人), 中国(大陸から5人, 台湾から2人), インド, チェコスロバキア, ポーランド, ハンガリー, 東独, 西独, フランス, イタリア, スペイン, オランダ, デンマーク, スウェーデン, スイス, フランス, イギリス, アメリカ, カナダ, メキシコ, チリと多彩な

のでそれぞれに癖があり, テキサス訛りの眠くなるような英語を聞いていると, 国際語として通用する標準的な英語は果して存在するのだろうか, 疑いような気がしてきてホッとさせられた。

表1中のレポート, トピックは総合討議や委員会の中で発表され, デモンストレーションはデータベースのオンラインあるいはマイクロコンピュータによるものである。ポスターは討議の中で2分間ほど発表が許されることもあり, 全く紹介もないこともあった。筆者もはじめてポスターに応募したが, たとえポスターでも短い講演はあった方がよいと感じた。

会議の概要は814ページに上るExtended Abstracts(全4巻)を見ていただくのが良いと思うが, 原稿の頁数の制限のためそれもできず, 全く私の興味からいくつか選び次に記すこととする。

#### 会議1: 1-アルカノール+n-アルカン系 (IUPAC)

この会議は2回目で来年度の最終レポートの作製へ向けて文献選定, データベースの作製を行うため11の委員会(Working Party)が開催された。私もその一つに参加して見た。この委員会ではPure Components-Data-Correlationsに関して討議する。委員長は第2ピリアル係数の収集で有名なJ.H.Dymondで約40名ほどが思い思いの席に座りケーキをパクつきながら活発に討議する。

「推奨値ばかりでなく原データがわかるようにしなくては意味がない」, 「いや推奨値の式化が大切なので原データは不要だ」などのやりとりがあってからTexas A&M大学TRCのR.C.Wilhoit博士がやおら分厚い1-アルカノール, およびn-アルカンの物性名の記載された2冊の文献表を配布した。結局, TRCが原データを供給し, それに基づき蒸気のPVT, 密度, 臨界値, 蒸発潜熱などの推奨値を選定し, 式化することとなり, 筋書き通り各物性の担当者が決った。

物質としては $C_5-C_{16}$ のアルカン,  $C_1-C_6$ の1-アルカノール類を選ぶこととなった。このやり取りを見ていて, これではアメリカ(TRC)が損するだけではないかと不審に思った。このことと次の会議のデータベースでのアメリカの熱心さからと併せ考えると, データベースに関してアメリカの優位性が崩れかけてきて, ヨーロッパと協調しなくてはならない事情が生じていることを示しているのではなからうかなど勝手に推測した。

座長を上げてみると H.V.Kehiaian (仏), D.Ambrose (英), K.C.Chao (米), H.Wenzel (西独), E.Wilhelm (オーストリア), G.M.Schneider (西独), H.Renon (仏) であった。ちょうど私の発表 "Equation of State for 1-Alkanols" のときの座長が Renon 教授で、氏は私の名前の発音は "ニシウミ" でいいのかと何度も念を押された。英語では、まずともに私の名前は呼ばれたことがないので、このフラットな正確な発音を聞かされて筆者は喜んだ。もっとも氏が何度も念を押したということは、氏にとっても以外であったのであろうが。

肝心の発表の方であるが、ヨーロッパでも最近では van der Waals 型の短い状態方程式が全盛で、私のような BWR 型の長い式は極めて珍しい存在といえる。嵩にかかってなぜ長い式など用いるのかといったイジメの質問もあったが、多くの方は興味を持っていろいろと質問してくれた。私の方がマルチイングリッシュに音をあげていると、聴衆どうして討論がはじまったりしてなかなか興味深く楽しむことができた。

私の興味があった講演・ポスターを以下に記す。

- J.H.Dymond : Virial Coefficients for 1-Alkanol + n-Alkane Mixtures (1-Alkanol の第 2 ビリアル係数の推奨値が発表された)
- R.C.Wilhoit : Recommended Properties of Pure Alcohols and n-Alkanes (先程の文献一覧表の披露)
- H.Knapp ら : Vapor-Liquid Equilibria in Alcohol-Alkane Systems : Methanol with Ethane and Ethene (対照的な相図)
- D.Tassios ら : Prediction of Vapor Pressures and Molar Volumes of the  $C_1$  to  $C_{16}$  Normal Alkanes with a Simple Cubic Equation of State (飽和体積を表現するために translation 概念を導入)
- J.H.Vera ら : Vapor-Liquid Equilibria Correlation of 1-Alkanol + n-Alkane Mixtures by a Cubic Equation of State (相互作用パラメータ  $a_{ij}$  の組成依存性)
- M.B.King ら : Extraction of Alkane / Alkanol Mixtures into Supercritical Carbon Dioxide (ブタノール +  $CO_2$  + オクタン系の超臨界抽出)

#### 会議 2 : データベース (CODATA)

お金を払ってデータを買うなどといった、だいそれたこととは縁のない筆者にとって、この 2 日間の会議は息抜きのつもりであった。ところがどうやらアメリカ対ヨーロッパの対決の場だと感じて、俄然おもしろくなった。発表件数を国別に整理してみたところつぎのようになった。

- (1) 北米 9 (アメリカ 8, カナダ 1)
- (2) ヨーロッパ 22 (西独 7, 仏 9, 英 3, スウェーデン 1, オランダ 2)
- (3) その他 7 (東独 2, ハンガリー 1, チェコ 1, ポーランド 2, 中国 1)

開催国がフランスだからヨーロッパが多いのは理解できるとしても、ずいぶんとデータベース (いくつかはシミュレータなどのコンピュータプログラムを含む) があるものだと感心させられる。これだけあると特徴のはっきりしたもの (たとえば水素、会合、熱媒体、プラズマ、鉄鋼など) 以外の汎用データベースは、どこかに協調点を見出さないと共倒れの恐れもでてくるであろう。事実、

— A.Maczynski : Machine Storage of Phase Equilibrium Data (CODATA Task Group State-of-The-Art Report)

— R.C.Wilhoit : Proposal for Standardization of Exchange of Thermodynamic Data Among Data Centers

の発表に見られるよう、また会議 1 の IUPAC の Workshop での動きに推測されるように、汎用データベースについては国際協調が始まっていると見るべきであろう。いくつかの汎用データベースに関する発表タイトルを以下に示す。

— The Chemical Abstracts Molecular Structure Based Bibliographic Data Online Retrieval System (米、ケミアブの文献情報検索。これは筆者の研究生生活で定着した唯一のデータベース)

— A Microcomputer - Based Fluid Thermodynamic Database 他 2 発表。(米、TRC の純物質の物性がマイコンあるいはオンラインで使えるようになった)

— Thermodynamic Databases in the U.S. National Standard Reference Data System 他 1 発表 (米、NBS を中心に DIPPR, CIS, Texas A&M, Molten Salt Data Center のデータバンクも使用できる)

- DIPPR Data Compilation Project 他 1 発表(米, AIChEによって作製が開始)
- Transfer of Data from Data Generators to Primary Data Sources, Data Banks and Users (米?, 出版物の International Data Series が MT でも使用できる)
- PPDS — Physical Property Data Service 他 1 発表(英, National Engineering Laboratory, いくつかのパッケージから成る)
- Dortmund Data Bank — Basis for the Development of Predicted Methods (西独, DDB と称す. 純物質, 混合物データ. UNIFAC による計算も行うことができる)
- DETHERM : A Thermophysical Property Data Bank for Chemical Engineering Applications (西独, DECHEMA)
- Experience in Application of a Query Update Date Bank System for Installation of a Thermodynamic Data Bank 他 1 発表(西独, BDBT — Berlin Data Bank Thermodynamic の略. 一部は DECHEMA DATA SERIES として出版されている. 年末にはフロッピーとして安価で提供されると聞いた. さらにシミュレーターとして BPBP を持つ)
- Comprehensive, Consistent Thermodynamic Tables (CODATA の 2 つのデータベースの開発が進んでいる)

筆者は PPDS に興味を持ったので, 帰国して日本での代理店に問い合わせたところ MT で 2,000 万円 (大学ではもっと安くなるが) とのことであった. やはりデータベースは筆者には無縁のようである.

なお, 座長は J.E.Dubois (仏), H.V.Kehiaian (仏), J.H.Dymond (英), S.I.Sandler (米), I.Ansara (仏), E.F.Westram, Jr. (米), H.Knapp (西独), R.D.Freeman (米), Zhihong Xu (中), R.Holud (チェコ), D.R.Lide, Jr. (米) であった.

### 会議 3 : 多成分系相平衡 (CODATA)

座長は L.Sobel (仏), J.P.O'Connell (米), W.Zielenkiewicz (ポーランド), B.L.Neinder (仏), J.Gmehling (西独), E.F.Westrum, Jr. (米), B.Ancian (仏), D.Laurent (仏), J.O.Valderrama (チリ) J.Barthel (西独), J.W.Hastie (米), L.V.Gurvich (ソ連), J.Fischer

(西独), M.J.Hiza (米), A.Fredenslund (デンマーク), K.E.Starling (米), H.Nishiumi (日), M.E.Baltatu (米) であった.

最後の会議が 3 つの会議のうち最大で講演・ポスターの半分を占める盛況であった. 内容, 雰囲気共に化学工学協会での年会や秋季大会と特に変わるところがなく居心地が良かった. 発表のうちいくつかと

- H.Knapp ら : Experimental Techniques for the Investigation of Phase Equilibria in Systems Consisting of Low Boiling Gases and High Boiling Solvents ( $N_2 + C_2H_4 + CH_3OH$  系)
- C.A.Eckert ら : Solubilities in Supercritical Fluids ( $CO +$  アセトンあるいはメタノール混合溶媒による超臨界抽出)
- C.-S.Tan : Measurement of Solubility of Solid in Supercritical Fluids by Internal Recycle Technique (超臨界抽出)
- E.F.Westruz, Jr. : Adiabatic Calorimetric Determination of Phase Behavior ( $CCl_4 + C(CH_3)_4$ ,  $NH_4F + H_2O$  の相関)
- A.Fredenslund ら : Success and Failures of Group Contribution Methods (グループ寄与法の改良 SUPERFAC 法の開発と限界)
- H.-A.Schneider ら : Thermodynamic Aspects of the Glass-Transition in the Compatible Poly(styrene) — Poly(vinylmethylether) Blend (ガラス転移点 ~ 組成の相関式)
- J.P.O'Connell ら : PTX Effects on the Phase Behavior of a Surfactant/Oil/Water/Alcohol System
- M.T.Ratzsch ら : Phase Equilibria in Systems with Polymer Components Treated by Continuous Thermodynamics (高分子の分子重量分布モデル)
- J.Fischer ら : Test of Kohler's Excess Gibbs Energy Equation for Ternary Mixtures (組成依存性の混合則)
- S.I.Sandler : A Basis for Equation of State Mixing Rules (混合則)
- K.C.Chao : Vapor-Liquid Equilibrium of Mixtures of Molecular Fluids by Equations of State (いろいろな状態方程式の比較)

M.B.Kingら : The Use of Equations of State and of Lattice Models for Predicting Liquid/Liquid and Liquid/Dense Fluid Equilibria

L.A.Galicia : Phase Equilibria and Critical Points in n-Alkanes + CO or N Systems (多成分系臨界点の計算)

D.Zudkevitch : Reliable Correlations of Physical and Phase Data for Desired Cheap and Safe Products (化学プロセスの設計のための“Expert System”の必要性)

なお、これら3つの会議の論文はFluid Phase Equilibriaの特別号として来年前半に出版されるので詳細はそちらを参照してほしい。

#### 人々

土曜日はわかるとしても金曜日にも会場の正面玄関と裏口が閉ざされてしまう。近頃のバリは週休3日制に移行したのかと一人で納得していたが、これは早合点。受付のスタッフに尋ねてみるとイランの留学生が会合を開くために、放っておくと中に入ってくるので、それを防ぐため閉じているとのことであった。たしかに玄関の前には100人もいようだろうか、多数の若者が居り、足許にくねくねしたアラビア文字(?)の粗末な本を置いて売っている。日本だったらアジ演説にピラ配りというところだが、いやに静かな(反?)ホメイニ氏連だった。

9月8日は日曜日で主催者が企画したヴェルサイユ宮殿のツアーに参加し、最後に森の中を歩いた。それはずいぶんと大きな木で直径5cm位の緑の棘に取り囲まれた丸い実がいっぱい成っていた。その皮をむくと栗のような茶色の実がでてくる。これが多分マロニエではないかと思い、Ambrose夫人に尋ねた。夫人は静かな英国の老淑女である。彼女のいうにはフランス語ならば多分マロンニエとでもいうのでしょうか、私は知りません。イギリスではhorse chest nutと呼び、この硬い実に穴を開けてそれに紐を通し、一人の子供が持っていて別の子供が棒でそれを打つとconquerorになるという遊びがあると紹介してくれた。さて、ちょうどこの日の夜にキャンパス内のRestaurant Sudで懇親会が開かれたが、帰りきわに夫人は私を呼びとめ、彼女の子想が当たったことを嬉しそうに報告された。

同じツアーの昼食はレストランを予約してあった。



写真3 会場のそばのカフェで。左より Hiza (NBS) 夫妻、Sobel 博士、武内氏 (東洋エンジニアリング)

隣りにNBSのHize夫妻が座られた。卓上の赤ワインが飲み易く、空けるといつの間にか新しい一本が置いてある。では、とコップにつぐとそのうちなくなり、また新しい一本が置いてある。婦人を間に挿んだHize博士も同様で、お互いに意気投合してコロラドへ行ったらぜひワインを飲もうということになった。そしてこの写真(写真3)。右から2人目のSobel博士(仮)が握手しているには「ワインの好きな奴に悪者はいない」。氏は3人目のワイン仲間である。

ピーっと指笛を鳴らす。俺の講演が始まるから聴きにこいと手招きで人々を呼んでいる。Columbia大学の教授も兼ねているAllied Chemical Corp.のD.Zudkevitch博士は異色の人材である。本稿にもそのテーマを記したが、1台のスライドと2台のOHPを用いたこの会議最後の講演は実質上、アメリカの化学工学界の代表としての取り扱われ方であった。大きなカメラを構えて演壇の前に行って写真を撮ったり、スライドの光の中を大きな影をつくらせて平気で歩いたり、常に目立つ行動をとる。AIChEの工業側に大きな力を持つといわれる氏は、また東欧の人々の憧れの星でもあるようで、氏の周りにはいつも人が取り巻いている。筆者が座長の代役をしたことを前に述べたが、これも Kehiaian氏がZudkevitch氏に相談した結果であった。正に世界の化学工学界のキー・マンの一人なのであろう。

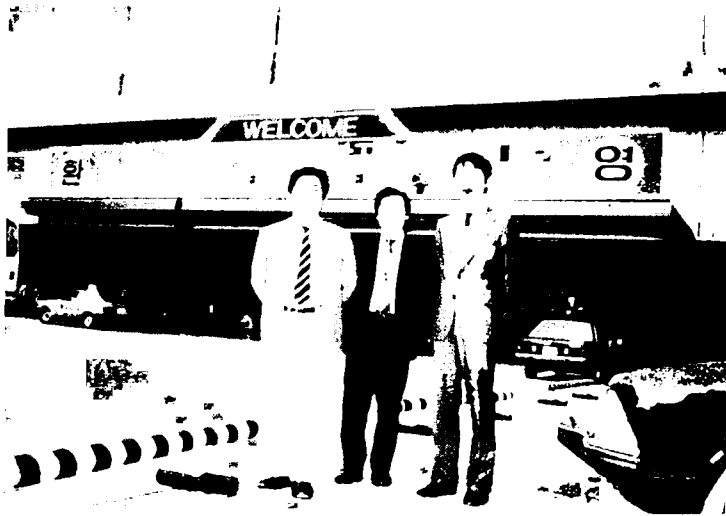
かくも世界はおもしろいと感じた次第である。欧米へ行く金があればパソコンの一台でも買った方がいいと筆者も感じないわけではないが、それでも…と考えさせられた国際会議であった。

INTERNATIONAL MEETINGS  
on  
PHASE EQUILIBRIUM AND RELATED PROPERTY DATA  
Measurement, Correlation, Prediction,  
Computer Handling and Dissemination  
organized by the  
INSTITUT DE TOPOLOGIE ET DE DYNAMIQUE DES SYSTEMES (ITODYS)  
Universite Paris VII - CNRS  
under the sponsorship of the  
INTERNATIONAL UNION OF PURE AND APPLIED CHEMISTRY (IUPAC)  
Commission on Thermodynamics  
Subcommittee on Thermodynamic Tables  
COMMITTEE ON DATA FOR SCIENCE AND TECHNOLOGY (CODATA)  
Task Group on Phase Equilibrium Data  
Task Group on Chemical Thermodynamic Tables  
Task Group on Property Data on High Pressure Phases  
Task Group on Data for the Chemical Industry  
CENTRE NATIONAL DE LA RECHERCHE SCIENTIFIQUE  
UNIVERSITE PARIS VII



speaker's

breakfast



PACHEC '83

5月9~11日

於 韓国ソウル



APCCHE '84

10月8~10日

於 タイ・バンコック

## 研究室暦

十年一日 法政大学に奉職し、今年で一〇年を迎える。正に時は流れ、その流れに身を任せている内に、虚しくも四二歳となつてしまった感が深い。

私が生を得た昭和一九年に、奇しくも、工学部の前身である法政大学航空工業専門学校も創立されたと聞く。また、工学部が、この小金井の新校舎へ移転して来た昭和三九年四月とほぼ同じ時期に、大学こそ異なるが、歩く度にガタピシと鳴るオンボロ木造校舎からピンピカの理工学部の校舎へ、私も大学一年生として移転した。正に日本の工業の大躍進が始まり、法政大学を含めた理工学系学部が陽の当たる場所へ出た時期と軌を一にする。そして、現在の私は、次代の担い手を育てながら自らは現代の工学に寄与したいものと努力している日々である。気がついてみれば、私のこれまでの人生は工学というお釈迦様の手の平の中でハネまわっている孫悟空のようなものであったのかもしれない。

夏休みともなれば、別荘に引き籠り、難し気な本などを広げ、浮世離れた毎日を通りかかっている人というのが、かつての私の大学の先生に対するイメージであつたように思う。現在でも、私と会った人は、まず例外なく、「大学の先生は暇があつてうらやましいですね」と言う。卒業生といえども、大学の先生の日常生活については、あまり御存じない方が多いのでは、ないだろうか。私にしても、あと二〇年もしたら、教授になりたての頃は何をし、どう思っていたのか、興味を持って振り返りたくなる事があるかもしれない。これを機会に去年(昭和六〇年)の手帳などを基に、私の研究室暦をめぐってみることにしよう。

学会のこと 私の専門は化学機械なので活動の場としている学会は化学工学協会である。この学会は会員数約一万人を有する規模学会で、私は和文誌編集委員、物性調査委員の他、研究部会の一つである状態方程式研究会の活動にも参画している。春の年会、秋の秋季大会と年に二回、全国規模の研究発表会が開かれる。その他、研究会の夏季セミナー、地方大会、それに、年に一度は国際会議で発表するように努力している。

年会は、原則的には四月初めに開催されるが、会場の都合で今回は年度末の三月二十八日から三〇日までの三日間、神奈川の関東学院大学で行われた。

新学期 そして、四月三日に入学式、四日からガイダンスで、授業は一日から開始される。その間、前年度の整理や新年度の準備があつて落ちつかない時期である。手帳を見ると、法政大学富士セミナーハウスで行う夏の研究会セミナーの予約をしたり、今年度から始まるTSS教室を手伝ってくれる大学院学生の訓練を始めたりしている。

今年から二年の任期で計算センター副所長を務めることになり、四日に初会合が行われた。今まではユーザーとして一方的にセンターとつきあつてきたが、今度は攻守、所を変えることになる。

四月八日(月)には、新ゼミ生一二名も揃つた。修士一年生一人を含めゼミ生は一三人。対する教師

は、私一人。しかし、同室の佐藤耕一助手が、卒業実験の一部を手伝ってくれるのがありがたい。私は、予め、ゼミ配属予定者を三つのグループに分けておき、三月に入ると一週間程度ずつ研究室に顔を出すことを勧める。この一週間、学生は、端末の操作実習などを通して研究室に慣れていくが、このOJTへの参加実績は、学生の研究室に対する積極性を測る上で、かなり信頼できるバロメータとなる。

授業開始 四月一〇日は、創立記念日で、一日(木)より授業が開始された。木曜日の一時限(9:00~10:30)、二時限(10:40~12:10)は、機械工学科一年生の化学実験。昼休みに今年度はじめての教室会議が開かれる。機械工学科の教員構成は、教授会メンバー、一七名、それ以外、一五名の計三名。三時限(1:00~2:30)は、経営工学科一年生の化学、四時限(2:40~4:10)はゼミ(特講)。例年なら小金井公園の花見が最初のゼミの時間となるのだが、この年は、生憎の雨となってしまった。夕方より研究室での酒盛が始まる。最近では学生の数も多く、物質的に豊かな時代を反映するのか、個人主義的閉鎖傾向が強いので、四年生になっても、お互い知らないことが多い。できるだけ早い時期に同じゼミの学生同士が知り合い、同じ釜の飯を食べる仲となる切っ掛けを作るという点で、花見は、私が大事にしている行事の一つである。自己紹介などして、酒が進むにつれて、少しずつ各人の持味が発揮されはじめ、座が盛り上って来る。

一二日(金)の一時限は、大学院の装置物性特論。受講生は三人で、今年は流行の超臨界抽出が主テーマ。二時限は、機械一年生の化学の講義。昼休みは、電算機利用委員会。三時限は、機械四年生のプロセス設計。この講義は、前期のみの講義で、受講生は、一二、三人。ほとんどが、私のゼミ所属の学生である。授業後、ゼミ室で端末操作の実習。4:30より工学部計画検討委員会。議題は、大学院設置申請に伴う多摩校地の利用計画、文部省定員増(650→780)の申請の件。

土曜日の一二日は、茗荷谷の化学工学協会会議室で、本年度第一回和文誌編集委員会が開催される(1:30~4:30)。終了後飲み会。近頃は、気心の知れた同世代人が、身の回りに少なかったが、この委員会で数人の意気投合する友達に出会うことができた。

四月一四日(日)快晴。私は、日野に住んでいる。この新興の区画整理地に、数年前から主婦が中心となって、子供会を作った。きょうは、廃品回収と、子供会の花壇の手入れに刈り出され、大汗をかいた。井戸端会議ならぬ、草取談義に花が咲く。

一五日(月)朝、五年生になった娘と一緒にジョギング。公園、そして行く途中の並木の桜は満開。一〇時から計算センター定例会。12:15、教室会議。2:30、U先生にグラフィック端末の手ほどき。一六日(火)、一七日(水)の午後は、新入生歓迎会のため休講。校庭では新入生の勧誘とデモンストラクションを兼ねた体連に属する団体による模範演技が行われ、通り道を埋めた出店の周りは、勧誘する声や人のざわめきで満ち、一年の内でも華やかなりである。

水曜日の一、二時限は、機械二年生の電子計算機演習、三時限は、機械一年生の電子計算機通論。

これが、授業開始一週間の私の行動録である。一〇年前と比べてみると、授業時間が、5コマから大学院も含めて9・5コマに増えた。この他、委員会活動やセンター副所長のような学内活動、学会



活動のための仕事が増加し研究を圧迫している。そのための時間を作ろうとすれば、帰宅時間を遅らせるしか手段がない。以前は、帰宅の用意にかかるのは、九時だったが、近頃は、門限の一〇時の方が多い。可能な限りは、頑張るとしても、どこかに限界はあるだろう。では、不義理をして、好きな研究世界に閉じ込めてしまえば良さそうにみえるが、研究を行う環境はそういった小社会の接点により作られている部分があり放棄するのも難かしい。講座制の研究室では分業が可能なので、その点はあまり問題とならない。法政大学工学部も含めた大半の私学のように、各人が独立していると、活躍しようとする程このジレンマがデッドロックとなる。

授業のこと　化学の受講者数は、経営七〇、機械一六〇であった。受講者数が、八〇人を越すと講義が、ひどくしづらくなる。化学の場合、同じような講義をしても年度末平均点では一〇点以上の違いが出てしまった。私は、授業態度に対しては、相当にうるさい。講義は、芝居と似ているところがある。教師は役者で、大向から声がかかれば、張り切るし、講義を子守唄代りに聞かれたのでは、やる気をなくす。参加することに意義がある、とは有名な言である。芝居で、観客が参加するとは、観客が役者の演技を見て楽しむことであり、観客が役者になることはない。これに対して、講義の受講生は役者の卵なのだ。観客は、やがて役者になる。一見、似た形式をとってはいるが、芝居と講義が決定的に異なる点は、ここにある。学生にとって目の前に居る教師は、明日の自分なのだ。自分のレベルと世の中のそれとの差を埋めるために大学へ勉強しに行く。その習得のために高い授業料を払っているはずだ。しかしながら、学生達は、むしろ、芝居の観客に近い参加の仕方をしがちで、その建前と現実のギャップはあまりに大きい。そこで、教師としては、文字通り、正に強いて勉めさせることになる。騒がしければ、怒鳴り、寝ていれば起こし、前の座席が空かないように、詰めさせる。さらにマークカードで毎回、出席を取るようになる。教育効果が上がることを期待してワープロ製本の講義資料も使っているし、教科書作りにも時間を割いた。レポートも出している。しかしながら、このような試行にもかかわらず、どれ程の教育効果を上げたのであろうか。そう考えると何とも虚しい気分になることが多い。

前期　五月の連休を過ぎる頃から、一週間を周期とする規則正しい生活が繰り返されるようになる。私は、大学時代には山歩きのクラブに入っていたが、六月一七日、クラブ創立以来、はじめての犠牲者を出し、OB会としての対策に七月末まで追われた。

六月二五日は、前期試験問題の締切日、出題の仕方によっては、採点に疲労感ばかり残り、後悔させられることがある。要は、教育効果を測るための試験なのだから、採点のし易さまで考慮して、出題を注意深く行うことが大切である。もともと、それは、締切日を守らない口実には、ならないのではあるが。

七月七日(日)より二週間の前期試験。実際に試験を受けた学生数は、化学の試験は機械が一六〇名、経営が七〇名。電子計算機通論が一六九名。昨年までは、これに加えて電子計算機演習も試験を行っていた。試験の採点は、楽しい労働ではない。あてづっぱうの回答、関係ないことを書いた答案。疲れてくると、白紙の答案が嬉しくなる。さらに、この時期は入試の出題締切日が重なり、憂鬱この上

もない。問題を捻り出す苦しみに比べたならば、解く方が、余程楽ではなからうか、などとさえ愚痴る。

ゼミと卒論 週一時限のゼミ(特講)では、主として、講演発表の訓練が行われる。まだ、研究室に慣れていない前期の前半では、私が研究室の共通専門知識の講義をしたり、卒業生の話や工場見学があったりする。後半から、一時限に二人ずつ、予め与えられた文献の講演発表をOHPを用いて行う。聴衆も質問が、義務づけられている。大部分の講演は、不十分で夏季セミナー前に再講演を課せられることが多い。夏季セミナーでは、教員や院生による講演、それと四年生による輪講を行う。昭和六〇年度の輪講は、私がカナダに留学した時収集した資料を使った、北極海での石油開発と、オイルサンドの掘削についてであった。後期では、講演発表が、二度回って来る。

卒論は、グループ実験(二人一組)か、あるいは、コンピュータを用いるシミュレーションを行ってゐる。どんなに小さくてもいいから、自分で新しいことを見つけるのが、この一年間の君の目的である。ゼミの最初に言っている。火曜日の午後は、二組ずつ、卒論の進行状況の報告、あるいはレポートを点検して過す。学生にとっては、四週間に一度の中間報告となる。ゼミは、大学の授業期間に合わせて行うが、卒論の方は、特に休みはない。学生も心得たもので、何や、かんと理由をつけて中間報告を引き延ばす。年末には、卒論の目次を提出させ、卒論書きの準備をする。年が、明けると、カップラーメンの山に埋もれた日が続くようになる。

本棚と自作の箱で囲まれた空間に、実験機一つを置いただけのゼミ室ではあるが、学生は愛着を感じて卒業して行くようである。

計算センターのこと 昭和五九年一〇月より新システムFACOM M360AP (計算速度7.3 MIPS、記憶メモリー24MB、磁気ディスク容量約10GB)が導入されてから半年で副所長を引き継いだ。ハードは一段落したが、ソフトの問題が残されている。どこでも、いつでも、何でも、これが私のセンターに対する要望であった。どこでも、これは、ほぼ満足されている。学内は、もちろん、学外からは電話を用いて利用できるし、N1ネットワークを用いれば全国的に接続することができる。いつでも、これは職員の勤務時間の問題があったが、自動運転が可能となり、夏休みより研究室では、午後一〇時までサービスを受けられるようになった。休日使用、徹夜利用も可能である。問題は、最後の、何でも、である。近頃の汎用機は、やたらと機能を持っていて、何でもできそうな印象を与えるが、いざ、使おうとして説明書を読もうとしても余程の知識がない限り、途方に暮れるに違いない。マニュアルがユーザー向けにできていないのだ。したがって、センターが、まず、しなくてはならない仕事は、ユーザーにシステムの持つ多様な機能を、よりわかり易い形で提供することであろう。具体的には、使用手引書の刊行が急務である。これまでセンターが提供できなかった図形処理と和文英文ワープロは研究者にとって大いに役立つに違いない。

もう一つは、導入の目玉であるTSSS教室を完成させなければならない。これまでのマークカードを読み込ませる方式では、大勢の学生が、狭いカフェテリア室で、ひしめきあって自分の結果がライプリンターから印刷されるのを待たなくてはならなかった。TSSS方式に変われば、一人一人が画

面を相手に自らを琢かねばならない。これまでよりはるかに大きな教育効果が約束されているといえよう。さらに、授業そのものにコンピュータを導入すべきであるという私の従来の主張の実現に一步步づくことになる。既に兼担所員としてこの新しい方式の導入に関わった一人としても何とか実りあるシステムを作り上げたいものである。幸い、FACOMも端末としてパソコンを使うLPFDと呼ばれる新教育システムに意欲を示しているのが心強い。

四月九日、一二日の工学部電算機利用委員会、二六日の拡大利用委員会でLPFDの利用手引の仕様、TSS教室の時間割などが決定された。TSS教室は新しく建設中の大学院棟一階に五〇人収容の二教室が確保され、六月初に建物の竣工式が行われた。それから機器の搬入、据え付け、機器テスト、教員によるチェック、メガ・フロッピーへのシステムの書き込みを終了し、六月中旬に授業へ提供が開始された。利用の手引は千部以上必要となり、第一会議室に一ページ分ずつ積上げ三〇いくつかの山ができた。この手引を各科に取りに来てもらった時の混乱、搬入の遅れがちな業者を叱咤激励し、何とか六月開室に間に合わせる事ができたなど、慌しいTSS教室の開室準備は、忘れられない出来事である。



法政大学富士セミナーハウスで夏期合宿

夏休み 七月一〇日～一三日、秋田市文化会館で開かれた第2回全国大学工業化学・化学工学合同研究集会に参加。一五日、

梅雨明け宣言。

月末は、秋季大会原稿の締切日。締切日まで、後何日とカレンダーを見ながらの仕事をするのは、どうも精神衛生上よくない。やっと、間に合わせる。

化学工学協会の物性調査委員会では、毎年「化学工学物性定数」という国際的に高い評価を受けている摘録集を刊行している。私も、その委員の一人で、摘録原稿の締切が、秋季大会同様、今月末であった。こちらの方は、多少遅れて八月上旬、発送。

暑い八月に入ると、科学万博やら、家族旅行（法政箱根荘では、水木先生と、国際結婚された妹さんご一家と、楽しいひと時を過ごすことができたやら家庭サービスに努め、一九～二日は、法政大学富士セミナー・ハウスで状態方程式研究会の夏期セミナーを開催。残念ながら、霊峰富士の姿は見られなかったが五〇人近くの方々には、満足していただけたようだ。この会の運営を手伝ってもらったゼミの学生にも刺激を与えただろうし、会場での学生の働きぶりは、参加者の間で好評であった。

二六日（月）～二八日（水）は、再び同じセミナー・ハウスで、ゼミの夏合宿を行う。佐々木ゼミとの合同合宿である。講演や輪講も行うが、中の一日は、フリー。一昨年は、富士登山。全員無事頂上を極めることができた。去年は、五合目からセミナー・ハウスまで樹海で有名な青木ガ原を下る六時間わたるハイキング。今年は、富士登山組とテニス組に分かれる。私は、山登りは遠慮して、今回はテニス組。今年も、天気にも恵まれ、よかった。前病気味のH君も参加して、本人なりに楽しかったようだ。写真は、セミナーハウスの玄関前で撮った記念写真である。ゼミの学生の就職、進学などの

進路決定もこの時期までには、ほぼ決定した。私のモットーは「よく学び、よく遊ぶ」、だが、近頃は純粹に遊びに集中することは稀で、ついでにということが多い。

国際学会と秋期大会 九月四日(水)、パリに向け、二週間の出張に出発。ヨーロッパに行くのは初めてで、国際会議で発表する緊張感と同時に楽しみでもあった。論文を二つ発表し、座長を経験することもでき、爽り多い思いで帰国することができた。国際会議も種々なレベルがあつて、それはそれでいいのだが、今回は緊張させられた。詳細は、別に書いた(分離技術、一九八六年一月号)のでここでは略す。

一〇月一六日〜一九日、第一九回化学工学協会秋季大会が、名古屋大学で開かれる。学会は、好学の士の集りであり、中には、競争相手もいるが、知り合いが増えて来ると楽しいものである。学会期間中は、自分が発表したり、他の人の発表を聞いて質問する発表会場にすることが多い。会場で機械工学科の卒業生に声をかけられたりすると、大変、嬉しいものである。また、今回は、トレーラーに自社製品を積んで展示している卒業生に会うこともできた。大学にいるときばかりでなく、社会に出た卒業生と学会でも繋りができるようになりたいものである。この大会ではないが、半年後の大阪で開かれた年会では、



文末に写真掲載

工学部教職員ゴルフ大会

私が指導した初めての大学院生のA君にも発表させることができた。この他、研究会の集いとか各種委員会が、昼休みや夜、開かれる。懇親会ではもつと広い範囲の人と旧交を暖めることができる。会社の人達とのコミュニケーションを図るのも、このときである。

コンペとコンバ 一月二〇日〜二六日は、工学祭。写真は、工学祭中の二日に富士平原ゴルフクラブで行われた工学部教職員ゴルフ愛好会の第五九回大会での記念写真である。機械工学科の能谷小井土、佐々木、高橋の諸先生方のお顔も見える(後列右端が筆者)。当日は穏やかに晴上がり、五合目まで、まっ白となった富士山を眺めながら楽しくプレーすることができた。この会は、三月末、夏休み、工学祭と年三回開かれている。

例年ならば、五月の末に学生達を日野の自宅に招くのだが、今年は、時期を逸し、工学祭中の二六日に行った。出てくる皿がすぐ空になる学生のすばらしい食欲には、毎年驚かされる。飲み過ぎた学生は、我が家に泊っていくことになるが、今年は、気分が悪くなったH君、外へ出て行ったまま、とうとう戻ってこなかった。翌朝、家にたどり着いたそうである。

一二月一〇日は、工学部研究集報の原稿締切日。例によつて、大騒ぎ。今回は、自分以外に学生の分も見なくてはならないので大変。研究発表をする度、論文を書くたびに、学生達は、成長していく。年会の原稿締切が、年末の二〇日。今年の秋季大会のシンポジウムのテーマは、超臨界抽出であったが、それを協会からプロシーディングとして刊行することになった。この原稿締切も同じ日であったが、とても間に合わず、一月になってからワープロ原稿を査読者に送ることとなってしまった。

年度末 年が開けた一月一〇日が、後期試験問題提出日。予算関係の処理、研究助成金の報告、センターの利用報告書きなどにうんざりしている内に、二五日から二週間の後期試験が、始まる。そして採点。私は、授業支援システムを作ったのでコンピュータ任せの部分は楽だが、学生のマークカードの記入ミスの修正など、案外、手間がかかるものである。成績を掲示すると、この時だけは心から反省したように見える学生が、なんとかならないか、と泣き落しにやってくる。種々理由を聞き、私も救ってやれないかという気になってコンピュータから打ち出されたエンマ帳をめくると、授業には一度も出席していなかったりする。こういった人間ほど社会に出ると、すばしっこく立ちまわり、出世するのかもしれない、などと思ったりする。正直者は、馬鹿を見ると言うが、消極的な正直者は、積極的なウソつきより劣りがちだということも事実かもしれない。

そして、二月一三、一四日は、工学部の入学試験、今年から会場確保の都合で三学科ずつ二日に分けて試験を行うことになった。試験が終わると採点。入試の採点こそ一年を通じてもつともつらい労働である。来る日も、来る日も同じ問題とつき合う苦しさ。これは、実際に経験してみないとわからない。

二月初旬の卒業論文の提出締切に続いて、研究室の卒論発表会が終れば、あとは恒例のスキー合宿（今年は、石打であった）を楽しみ、三月二四日の卒業式（昭和六〇年度は小金井校舎の生協食堂、昭和六一年度は新宿のハイアットホテルで豪華に）をもって学生達は、思い出多い大学生活を終え、社会へ巣立つことになる。もつとも、三月末までかかって、卒業論文を仕上げる学生も毎年、何人かは、いるが。そして、私の方は、年会の発表準備や研究会のアレンジ、新学期の教材の確保に忙しくなる。

これで私の研究室暦をめくり終えた。優雅などといったイメージとは、ほど遠い毎日であることは、お分り頂けたことと思う。また、本稿で記したのは、一大学教師の日常生活の例ではあるが、これが、大学教員の平均的な日常生活というわけではない。

個々の出来事は違うにしても、似たようなリズムを繰り返しながら、私は、この十年間を過ごしてきた。教育者としてのリズムは授業日程にそって、一年という長いうねりを一周期として定期的にやってくるが、研究者としてのそれは原稿締切日によって分割されている。あたかも、原稿締切日が月末と記されているカレンダー、それも時には締切が二つも重なっていたりするカレンダーを横目で眺めながら、時間を捻出するのに汲々として一〇年間を過ごした感がある。ただ、最近では、学内活動や、学会活動の負担が、増えた分だけ、一段と研究時間が、圧迫され、深刻な悩みとなってきた。

このように、担々とした毎日ではあるが、この一〇年間の月日にも起伏はあり、昭和五四年八月から二〇カ月のカナダ留学は、私に国際社会への参加の門を開いてくれたし、昭和五九年二月二日の笠島正行教授の痛ましい自殺は、大学といえども、研究、教育だけの場ではないことを教えてくれた。

私のささやかなアフターサービスの一つとして、ゼミの卒業生と共に研究室創立十周年を祝う記念パーティを現在、計画している。

（西海英雄・教授）

富士セミナーハウス  
の夏合宿  
昭和60年8月26～28日



工学部教職員ゴルフ大会  
昭和60年11月21日  
富士平原ゴルフクラブ

スキー合宿  
昭和62年2月19～21日  
サンパレースキー場



## 記念行事報告

### I. 記念祝賀会

1. 日時：昭和61年11月23日（日）午後3時～24日（月）朝

2. 場所：法政三浦荘

3. 参加者：西海英雄・智恵子・奈穂子（小六）、佐藤耕一

（昭和52年度）吉田茂喜

（昭和56年度）後藤洋一，長谷川衛，斎藤篤

（昭和58年度）青木勉，福田浩，田中義昭，服部宏志

（昭和59年度）諸屋浩和

（昭和60年度）井崎健晴，伊藤浩之，大久保隆司，小田中利成，梶ガ谷安弘，

（昭和61年度）河村光貴

泊りがけにしたので数は多くなかったが，吉田（中之条），田中（仙台），服部（京都）の諸氏が遠路より参加してくれた。学生時代に戻り一晩飲んで騒いで，朝には思い思いに散って行った。



### II. 記念基金

下記の方のご寄付を得た。芳名を記して感謝の意を表す。

（昭和52年度）丸木伸生，本野宗孝，永田一男，吉田茂樹

（昭和53年度）安部治彦，佐藤幸博

（昭和56年度）後藤洋一，長谷川衛

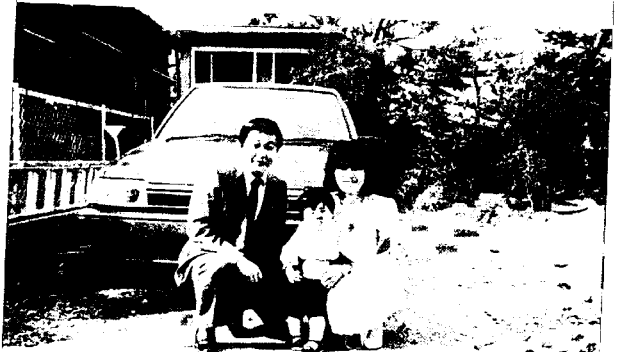
（昭和58年度）青木勉，福田浩，遠藤哲夫，田中義昭，服部宏志

（昭和59年度）石倉芳人

（昭和60年度）大久保隆司，小田中利成，平岡新太郎，祝葉一

計181,520円であった。これらの寄付金は文集の作成，PC9801VX2の購入に使われた。

あけましておめでとうございます。



新春のお慶び

ふだんのご無沙汰、どうぞお許しは  
るかにご一同様のご多幸をお祈り

昭和六十二年 元旦

所沢市緑町三丁目七

菊池仁作

より子

前略

通知

しく

当日

なりました。  
しくお願いいたします。  
昭和62年元旦

区嶋海町神ノ倉3番地472  
TEL(052)876-1923  
永田一男・久江美有



〒377-04

群馬県吾妻郡中込町大字大塚  
200-1

吉田茂喜

猪苗代スキ場  
水戸屋にて

岩永 透



昭和55年11月に結婚、去年の  
5月に長女が誕生しました。  
現在、油とインクに塗れて仕  
事をやっています。  
今回は残念ながら参加できま  
が次回はずむ。

務先  
タリました  
〒130 墨田区菊川二丁目十二  
丸木伸生  
TEL 03-6351-7636  
勤務先 武石印刷(株) 03-6331-2102



あけましておめでとうございます。



旧年中はお世話になりました。

お願いいたします。  
昭和62年元旦

正明寺2丁目12-1-104  
近藤 元・裕子  
直人

(旧姓 河内)

私もやっと結婚できました。



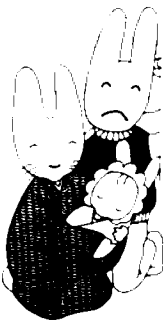
皆さまにはますますご清栄のことと存じます。  
このたび私たちは結婚式を挙げ  
新生活への第一歩をふみ出しました。  
新家庭への夢や設計は限りなく広がりますが  
なによりもくつろげる家庭にしたいと  
話し合っています。  
今後とも皆さまのご指導と  
末永いおつきあいをお願いいたします。  
新居の方もぜひ一度お立ち寄りください。  
お待ちしております。  
昭和六十年十二月吉日

ご媒酌人 阪井登昭様ご夫妻  
結婚式 十一月十七日 於 中野サンブラザ  
〒一九六 東京都昭島市福島町二九九一  
千枝狂十号

TEL O四二五(四五)五八二六

洪 口

厚 直 人  
(旧姓 河内)



今年はいよいよ  
なりぞです。  
よろしくお祈りします。

昨年私達に待望の三世誕生  
親子揃って元気に新年を理  
えました。  
本年は子供ともども宜敷く  
お引立てのほどお願い申し  
上げます

昭和62年 元旦



☎314-01

茨城県鹿島郡神栖町神栖4丁目7-14 松風荘  
☎(0299) 925364

田 口 雄 智 涼  
二 子 也  
(2か月)

仕事の都合で、1/23<sup>24</sup>の祝賀会は参加  
できなくなりました。  
年末、記念機器主人のときはお心ごころありがとうございます。  
住所が「箱根崎」ではなく「箱根崎」  
参照下さい。  
西多摩郡 瑞穂町 箱根崎 527  
佐藤 幸博

## 西海ゼミ10周年に寄せる言葉

昭和53年度卒 近藤 元

西海ゼミの10周年おめでとうございます。西海ゼミがスタートしてからもう10年も経ってしまったかと思うと月日の早さを本当に感じます。

さて、私は西海ゼミ第2回生の1人で、当時、化学反応関係のゼミナルに入るとは正直いって考えても見なかったわけですが、それがどういうわけか、現在の私の職業に少なからず、関係があるようです。当時、私達は第1回生の先輩方によるテーマの延長上にあつたわけですが、その先輩方によって設計された装置でもって私達は実験を行いました。それが「可視光線照射汚水処理装置」だったので。当時の私は知識等に大変乏しく実験データの整理や進め方についていくのがやっとだったと思います。しかしながらゼミの同僚や助手の方達の協力によって卒業論文を提出する事ができ、感謝しております。

私の西海ゼミで過ごした1年の思い出は、実験ばかりに追われた事ばかりではありません。むしろ先生と同僚達といっしょに生き生きと楽しくという雰囲気でした。これもすべて先生の人柄によって作られたようなものでしたが現在のゼミ生の方達はどうか?! 何となく先生の明るい笑い声が聞こえてきそうです。

さて、現在の私は愛知県西春日井郡にある表面処理機械のメーカーである新東ブレーター(株)に勤務して居ります。表面処理の機械というとピンとこない方が多いと思いますが、要するにいろいろな部品の表面の研磨等を行う機械という事です。しかし、私はこの機械を扱っているわけではなくもう1つの営業品目として廃水処理装置という機械があり、この計画を担当しております。

皆さんもご存じかとは思いますが日本には公害防止に関するいろいろな規則があります。そしてその規則のもとに各種のメーカーでは、廃水処理装置等を設置して事業所内で発生した廃水を処理しなくてはならないのです。私の会社で販売している廃水処理装置は”プレコート式真空濾過装置”(説明していると長くなるので省略します。)という名前のもので、すでに国内でも何100台という数の機械が販売されました。大きな所では焼却場のように100m<sup>3</sup>以上という、大量の廃水処理や1日1m<sup>3</sup>程度の小さな事業所のものまでいろいろです。そしてそれぞれは、すべて客先の設置場所のスペース等により装置のレイアウトが異なります。これはこの機械の難しい所の1つだと思えます。

最近海外にも出荷しており、アメリカや中国・韓国等にも輸出しております。実は昨年7月から約2ヶ月間アメリカ・オハイオ州にあるホンダオブアメリカに廃水処理装置を輸出し、そのスーパーバイザーという事で行って来ました。これからも海外への輸出が増加するであろうし、海外出張も多くなっていく様です。私もすでに30を過ぎており、会社の中堅社員として頑張らなくてはなりません。

まとまりのない内容で申し訳ありませんが、最後に西海ゼミが今後も15回、20回と益々発展することを祈って今回の西海ゼミ10周年に送る言葉とさせていただきます。

昭和56年度卒業

第4回ゼミ生

西海研究室開室10周年を心より  
お祝い申し上げます。

50年度卒業の長谷川です。現在  
大日本インキ化学工業株式会社機械事業  
部の中の設計課に所属し、印刷・紙工  
関連機器の開発・設計を担当してい  
ます。

入社して5年目。仕事に対する自信と  
日置きによって来る今日の頃です。  
仕事に頭を悩ませながらも  
十分余裕を楽しんでいます。  
企業の中に居る方は組織に  
楽しんで仕事し、遊びましょう。

昭和56年度卒  
長谷川 衛

大日本インキ化学工業株式会社

長谷川 衛

機械設計課  
〒大日本インキ機械技術センター  
〒135 東京都江東区枝川2丁目24番12号  
電話東京 (03) 647-5411 (代表)  
本社 東京都中央区日本橋3-7-20 デックビル  
電話東京 (03) 272-4511 (代表)  
テレックス 222-2977 〒103



猪苗代スキ場で  
(片山・大河内先生も)

明けましてお芽出とう  
ごさいます

皆様お揃いにて、

御機嫌よろしく

新しい年を迎え邁ほされ  
ました事とお喜び申し上げます。

元旦

斎藤 篤

相模原市上溝一丁目  
後藤洋一



年の  
柄の  
申し上げます



技術課 技術課  
後藤 洋一

〒114 東京都田代町4-2206 ☎0427-29-5111(代)  
☎0427-22-0646 ☎0427-29-5121(機)



audio-technica

## 無 題

昭和56年度卒 大日本インキ化学工業(株)

長谷川 衛

大学を卒業し、社会人として早5年目、今思い起こすゼミの1年間は特に印象深いものとして残っています。

実験、データ処理、そして卒論と流れるように過ごせたわけではありませんが、いろいろと寄り道する中で勉強になった点は少なからずあったと思います。

時にはゼミ仲間と先生を囲んで酒を酌み交わしながら考えを述べたり、ゼミ合宿の時などは前日の夜中に車で出て、目的の工場見学を徹夜の頭と身体で見てまわり、その後に遊びに繰り出すという豪快さで、なかなか楽しいものでした。

ただ、今から思うと学生に与えられたゼミの中のパートを自分達なりにアイデアを出し合い、もっと動かすようにしていたらより充実していたかもしれません。

現在、私は印刷関連機器の開発、設計を担当しています。仕事の性質上必要な情報、知識というのは多過ぎて困るということはなく、新しいテーマに取りかかると常に未知の分野の方が多く、その度ごとに基礎的な事を頭に詰めながら仕事をこなしていくという状態です。

また、自分のやった仕事は後に付いて来ます。トラブルなどが発生するのは常に自分の手から離れた後、長いオーダーでかかわって来ます。それだけに一つ一つの仕事は、十分に掘り下げた、しっかりしたものでなければならず、いつ問題が起こるかわからない危険を内包しています。

それに基礎研究ではなく、製品の開発・設計をやっている人間には、知識を得る自由度が意外に低いということです。

製品開発のテーマ、その為のスペックは上から下へと流れ、実際その為の情報収集、知識として身に付けることも、アングルが狭くなりますし、毎日の業務上の処理に追われる

こともしばしばです。そんな中に現在置かれて自分のレベルの低さを実感しながらも、納得のいくものができたと思っは喜び、うまくいかないと落ち込むという毎日を送っています。

最近、毎日の自分のやっている仕事が世の中の先端技術に対して、どのへんのランクに位置付けられているのだろうか、ふと思うことがあります。現在担当している（開発している）ものは今まで業界内にはないということが解っていても、はたして、その製品に取入れられている方法・方式は時代遅れと呼ばれるか、またはありきたりという言葉で置き換わってしまうのではないのだろうかという不安が頭のどこかにかすめます。

もちろん、その先端技術という抽象的な言葉の中にはいろいろな意味が含まれていると思います。

また、業界によって、あるいは製品のスペックによっては、そうした不安や疑問が生じない場合もあるでしょう。

しかし、いつでも自分のやっている仕事が世の中のことより常に一步リードしているという自負は気になることでもあるし、自信にもつながるものだと思います。

こうした暗中摸索のような状態の私の所属している部所自体が組織化されて、1、5年しか過ぎておらず、個人集団という感じが強い傾向にあります。それゆえ、体系化できてない分野も多くあり、これからが組織として動き出す段階です。私などが体系化をやる立場にいる人間というのは大変でもあり、やりがいのあることだと思います。

ある部分的な機構を考える場合にでも、その為の情報が入座に検索でき、デバイスが決まり、図面が見られるというように発想から実際の具体化までがスピーディに出来てしまう。しかも、プランが1つだけにとどまらず、何個かのプランが順次検索できるシステムが目指す体系化の1つです。

実際に具体的な見通しがプランとして1つあると、心理的にも余裕が生まれ、新しい発想がひらめくのを助けてくれることがあるものです。そして、新しい発想が具体化したらまた、ストックしておくのです。

眠っている時以外のすべての時に、頭の中で考えたことが新しい発想のヒントになり、すぐに形として出て来る。そんなことを考えている今日この頃です。

結びに、西海研究室開室10周年を祝し、合わせて西海先生、佐藤先生をはじめ研究室の皆様の御健勝をお祈り申し上げます。

昭和61年12月吉日



日野の自宅で  
(第4回ゼミ生も一緒に)

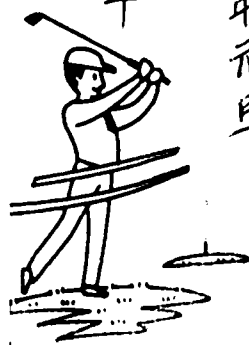
あけまして  
おめでとう  
ございます

浜村昌平

昭和62年元旦

申し上げます。

本年もよろしくお願ひ



遅くなりましたことお詫言ひ。

11月23日は参加者予定でしたが  
現在としかかっている湖沼アウトカ岸村と沼に  
参加できずにはありつたので皆様のよろしく  
お伝え下さい

(近況)

現在は 日中電文(株) 情報処理第一事業課 情報部  
自治体原簿部 という長い名前の職場に在籍し、  
主に 官公庁の外部団体に対するコンピュータの開発  
(100%から大型コンピュータ) をやっているつもり。  
既述といふこといわずに 資料から SEL への  
幅広い仕事です

P.S

浜村氏も現在の現場から見れば  
ぬれたいめに参加してはいけません。

鹿内正善

昭和57年度卒業

第5回ゼミ生



## 会社内定から入社、配属まで

昭和58年度卒 青木 勉

大学も4年生となると、大学院へ進む者を除いては就職先を決定しなければならなくなる。自分が一生働くかもしれないので会社の選択にはとても慎重にならなくてはいけない。私はその時を通過してきた一人として自分の経験を書き進めて行こうと思う。

就職したい企業をあれよこれよとさがしていた6月頃、私は大学の推薦状を持ってまず第一希望である電機会社への入社試験を受けたのであった。それまでには他の会社を訪問したり、工場見学をしたりしていたが、実際に試験を受けるのは初めてであった。試験は筆記試験と面接試験があり、筆記試験では国語、数学、英語の常識問題と300問の性格診断を、面接は集団面接で7～8人程度一緒に行うものであった。面接試験では試験官3人が順々に試験を受ける者ひとりひとりに質問を行っていた。だから面接試験は100分程かかっていたと思う。やはり卒業論文についての質問が多く簡潔で上手に卒業論文についての内容を説明しなくてはならない。そうして一週間程で内定の通知をいただき就職先が決定したのであった。しかし、結果を待っているその間にでも、他の会社の方と会って就職活動をしていた。

内定をすると、会社からはいろいろな会社に関する資料が送られてくる。また英語の通信教育を勧められたり、宿題を出してくる。そして11月1日には内定者全員に集合がかけられて都内のホテルで社長のお話を聞くことになった。残りの学生生活の間に社会人となる準備をせよとか社会人としての心構えなどを話されるのである。

そうしているうちに大学を卒業し会社に入社したのであった。会社に入ってからはずぐに研修がある。約4ヶ月間社会人としてやって行ける様に鍛えられるのである。その内容は具体的には、新入社員（約340名）全員が合宿研修を受ける。期間は一週間で話を聞いたりグループである題目について話し合って代表者が発表したりする。それが終了すると新入社員は半分に分けられ、半数の者はそのまま工場実習としてやく2ヶ月工場働くことになる。残りの半数の者は、引続き合宿研修が行われ、営業実習の訓練を受ける。これも期間は一週間程で、営業マンとしてのお店でお客との接し方、店頭広告の描き方等実務に生かされる様な訓練である。そしてその合宿が終了すると営業実習として東京や関東、大阪の営業所へ行き、そこから各お店の店頭販売員としてこれも2ヶ月程働く事になる。その2ヶ月が過ぎると再度新入社員全員が集合し合宿を行う。その合宿ではいく人かの代表が、実習の報告発表を行う。合宿は3日程で終了する。そして今度は今まで工場実習を受けた者は引き続き営業実習の為の合宿を行い、営業実習を受けた者はそのまま工場実習を受ける事になる。さらに2ヶ月が過ぎ、



工場実習、営業実習を終了すると最後の合宿としてまた新入社員全員が集合する。その合宿では前回と同様に実習の報告を行ったり配属の説明を受けたりする。そしてその場所で配属が決定するのであった。配属が決定し、合宿も終了すると各配属の事業部、営業所、研究所へ各自行くのである。しかしこの時点では最終的な職場は決定していないのであった。

こうして各配属先に行くと、またその場所での研修が待っている。これは合宿ではないが約2週間の日程で実務に関係することについて技術、営業、品質保障等の立場の上司からのお話を聞くのである。また「どんな技術者になりたいか」という題目で文章を書いたりもする。そして技術部長との面談を行い最終的な位置付けがされる。時期にして8月も2週目に入った頃のことであった。やっと配属が決まったとほっとしているのも束の間、細かい仕事の進め方についてマンツーマン方式で説明を受ける講習をさらにうけることになった。

以上、私が経験した事柄を書いてきたわけであるが、どれもこれも簡単な内容になってしまい、不明確な部分もあるかもしれない。しかし、どのことをとって内容も奥深いことばかりである。というわけで内定から入社、配属まで数々のいろいろな経路をたどるということをおわかりできたであろう。これから就職する者にとってはあまり参考にはならなかったかもしれないが、これからこの先にこの様なことが待っているのだということを頭に入れておいて欲しいと思った。

## うちの研究室

### 西海研究室

(化学機械工学研究室)

#### 西海英雄教授

今四月、桜花舞う小倉井公園の  
 庭から研究室が始まる。すでに三  
 月から研究室に顔を出し、コンビ  
 ユータの端末を操作したり、先苗  
 の圃間調査や実験の手伝いをして  
 りして馴れじみになった新四年生  
 もいれば、こんな研究室に配属さ  
 れることになり本意ながらとは  
 じめて顔を出す新顔もいる。それ  
 でも卒業する頃には「この一年は  
 楽しかった」と言っておくかへ就職  
 して行くのだから不思議なもの  
 だ。研究室に馴れた五月末、学生  
 達を自宅に招く。写真はその時の  
 コマである。

何でもいい、自分の目で見つけ  
 るリトル・サクセス・小さな成功  
 をこの一年間に得てほしいと、は  
 じめの特訓の時に私は新四年生に  
 述べた。一年間経つてみると、ス  
 ピード感を要求される卒業の成績  
 と、自分の目で何かをみつける、  
 作り出すという忍耐とは必ずしも  
 同じ性質には基づいていないとい  
 うことに気づかされる。私は法

政大学に就職して十年を迎え、今  
 年四十二才になるが、この思いに  
 は毎年毎年驚かされる。  
 私の師である化学機械工学研究室  
 は、津々見雄文(工学部長)、佐々  
 木杜市、片山寛武(イリノイ大学  
 留学中)教授と私、それに大河内  
 正一助教授、旭田千尋兼任講師、  
 佐藤耕一助手の七名のスタッフよ  
 り成る。工学部各員の化学、化学  
 実験の他、機械工学部の化学機械  
 等の専門科目を受け持っている。  
 機械工学部関係の私の担当科目  
 は、化学(二年)、化学実験(二年)、  
 電子計測機(一年)、圃間調査(一  
 年)、プロセス設計(四年)、特訓  
 (四年)、卒業研究(四年)、それ  
 に大学院の後置物性特論である。  
 昭和六十一年度の当研究室の構  
 成は、四年生九名、修士二年二名、  
 同一年一名で、佐藤助手にも同室  
 の前で実験の部を指導していた  
 だいている。私の専門は熱物性状  
 態方程式、反応装置工学で、卒業  
 論文のテーマもそれに沿って、高



圧気液相平衡測定装置、高圧気体中  
 V-T測定装置、外部照射型気泡塔  
 光反応装置を用いた実験、あるいは  
 コンピュータ・シミュレーショ  
 ンを行っている。  
 夏合宿は二、三年法政大学  
 富士セミナーハウスで行うことに  
 定宿している。ある時は富士登山、  
 またある時は五百日からセミナー  
 ハウスまでのハイキング、そして  
 デニスと楽しんでる。  
 そして、冬、卒業論文提出、免  
 状と前後して冬のスキー合宿。こ  
 ちの方は夏合宿とは違い、セミ  
 ンで授けられることもなく、それぞれ  
 に楽しんで一年間の研究室生活  
 を、また、学生時代を終了するこ  
 とになる。

法政大学工学部機械工学科同窓会会報 昭和61年4月17日

昭和59年度卒業  
第7回ゼミ生

謹賀新年

昨年皆様のご祝福を頂き  
新生活に入りました。  
お蔭さまで幸せなお正月を  
迎えられました。  
何分未熟な二人ですので今後とも  
末永くご指導お引き立てをお願い  
申し上げます。

昭和六十二年 元旦

木下茂樹

あけましておめでとうございます。



旧年中はお世話になりました。  
本年もどうぞよろしく願いたします。  
昭和62年元旦



横浜市泉区中田町1063-2 ☎045-802-1055  
六岡恒平

粉体技術の **フジ** 創立1924  
—ふるい分け・混合・乾燥・輸送機器とエンジニアリング—  
営業本部 営業技術部

諸星浩和

株式会社 徳寿工作所  
本社・工場 神奈川県横浜市西区大田3-19 〒224 電話(0463)32-1809C  
FAX (0463)32-5119  
東京事務所 東京都文京区本郷3-30-11本郷スカイビル 〒113 電話(03)815-3724C  
大阪支店 大阪府西区北堀江1-5-2四ツ橋新興ビル 〒550 電話(06)541-9160C

謹賀新年



昭和六十二年 元旦

仕事の都合で同窓会に  
出られませんでした。  
機会があればお会いしたい  
と思っています。

平塚市田村586-1-2

三菱ガス化学社宅103号

福島 充

現在 東電工業(株)  
技術部検査課で

非破壊検査を担当しています。

田宮孝一

電話(03)九三六一八二五六

〒105 東京都板橋区高島平二一八-1-120二

昭和六十二年元旦

東京カーテンパレスは新しいで結婚式を挙げました  
何分にも未熟で万事に至らぬ二人でございますが  
今後共よろしくお願い申し上げます  
昭和六十二年元旦

いぶたして、今年のお正月の1/23の郵便番号一八七  
会には出席できません、残念でした。あうじ  
その時期結婚式をあげました。日立 伊勢  
東京エレクトロニクスに入社して2年間の研修も  
終わりのつとて、今年もよろしくお願いします。旧姓 島田 誠

千 島田 誠

島田 誠

昭和60年度卒業

第8回ゼミ生

法政大学富士ゼミナ  
ハウスでの夏合宿

拜啓

開室十周年誠に  
西海先生の講義を拝聴  
やハヶ月が過ぎました。比  
してがんばっているだろ

でありすが、体をこわし  
中でありすが。皆ががんば  
れているような気がして  
ます。そうゆうわけで記念  
出席できません。次の機会  
すのでよろしくお願いた  
つけて下さい。

十月四日

祝葉一

敬具



寺田吉宏

3-1-42

446

残暑お見舞

申しあげます

日本ラウエータ群馬工場  
カーエアコン関係の仕事  
と毎日昼休みにサッカー  
をする。就職には当社を  
競う。就職には当社を  
大学の遊びに行きます(酒  
を) お元気で 古の丹



東京都三鷹市野崎120  
第11目啓寮 181

田中一浩

世田谷区弦巻1-4-4

伊崎 健晴

御市小智 613  
雑詩  
今年 秋  
穂香南 弘

神奈川県横浜市

梶谷安弘

25911  
B2927

## 西海ゼミでの1年間

昭和60年度卒 小田中 利成

私の西海ゼミでの生活は、一太郎（仮名）君との出会いからはじまった。

それは、3月のOJTの時、私はコンピュータの使い方を先輩に習いにゼミ室へ通っていました。その時に一太郎君も通っていました。その時、パーネットの実験を2人で手伝ったのが悪夢の始まりでした。

4月になり、卒業論文のテーマの発表になり、私は一太郎君と組んでパーネットの実験をすることになり、内心とても幸福に思い、この1年は退屈しないで済みそうだととても嬉しくなり涙が出そうになりました。

しばらくすると、その思いが現実になりました。まず、私が水温計を割ってしまい、中に入っていた水銀をばらまいてしまいました。この為、実験が出来なくなり、装置の手入れをしていましたが、一太郎君がわたしの期待にこたえ、1つしかないナットを切ってしまいました。私はこんな一太郎君がとても楽しく思え、それと同時に友達の友情に涙がでました。『これで彼も同罪だ』と内心想いました。

そして、私達は沢山の実験装置を壊しました。そのため、私達は西海ゼミ最強のクラッシャーコンビと他のゼミ仲間から呼ばれる様になりました。

この為、西海先生が卒業論文のテーマを”実験”から”実験装置製作”に変えてしまいました。

いろいろな事が有りましたが卒業する事が出来ました。どうも有難うございました。

以下に同期との思い出を書きます

- ・カレー作りの天才、パチプロの穂高君
- ・ロードランナーのとてもじょうずな伊藤君
- ・酔って電車でひかれそうになった寺田君
- ・酔って西海先生と肩を組んで語り合った加藤君
- ・宴会幹事の高井君
- ・夜中にさまよう平岡君
- ・影の薄かった田中君
- ・コンピュータとお話する梶ヶ谷君
- ・早好きの伊崎君
- ・皆のアイドルだった祝君
- ・三鷹に早をかこった新井さん

皆さん今後ともよろしくおねがいします！！

1987.3.14 法政大学工学部 西海ゼミ室にて

第9回ゼミ生



と 日 幸

# 賀正

私くしのまっけ優秀な人材を卒業させ、しきつのはやうに残念、付三とと思ひますが、此も運命といつて、めでたから迎へたいと、いふまじい新年を迎え

あかりい希望にもする新年を迎え

祈一同様の多幸を

昭和六十二年元旦

心から お祈り申し上げます

933 高岡市横田町一丁目三三三六

是非心解に社名への 水 巻 久 哉の息子

門外を祝つて下さる、人々年々(特に此方から)ますますしくお願ひします。

電話(0577)二二一九〇七一

## 三 留

電話〇三二七五五 一七八二

国分寺市東元町一四八  
南和荘七号  
河村光貴 185

## 藤木 浩

世田谷区池尻三二一 305

宮本健次(七三庄)

154

B2969

B287

B0505

広島県府中市高不町 270-1  
稻尾裕延

726

B0710組

559371

## 在 学 生 代 表 の 言 葉

大学院 修士 1年 伊崎 健晴  
梶ヶ谷 安弘

西海英雄研究室 開設10周年おめでとうございます。私がこの研究室に入ったのは、第8期の時でありその後大学院に進学し第8期、第9期、第10期とこの研究室に在籍することになっています。

このゼミに入って最初のうちは授業のときの先生のイメージが強くて何かとつつきにくくおもえた、みんなも後悔していたようだったが、ゼミのなかに入ってしばらくするとそうでもなく、親しみがもてる先生であることがわかった。私が特にこのゼミについて思うことは「恵まれている」と言うことである。

まずゼミ室が広いということ、他の機械科のゼミ室はとても狭く、実験室も間に合わせのような所も多い中で、この研究室は適度に広く実験室も整っている。また、大型コンピュータの利用に関してもこれほど恵まれているゼミもめずらしいと思う、大型コンピュータを使用しているゼミは機械科ではこのゼミの他に1つだけであり、学生時代に大型コンピュータを自由に使用できる環境が有るということはすばらしい事である。また、OBの皆さまのおかげでPC-9801VXを自由に使える環境にもなりました。

今、こうして私がワープロを打っているのもOBの皆様のおかげであります。

先生は毎年新しいゼミ生がはいるとき「今度のゼミ生は優秀だ」と毎年同じことをいいますが、そうでもなくてほっとします。やはりゼミ生は毎年同じようなことをやって、伝統的な卒業論文の提出のしかたをしています、私も初代院生の新井努さんにずいぶん御世話になったものでした。

卒業前になると、みんな「いいゼミだ」といって卒業していきます。同じゼミに1年間一緒にいると友情も深まり卒業していくと思うと涙がでそうになります。嫌な富士登山、楽しかったSKI合宿、ボーリング大会、たびたびあった飲み会などなどいろいろな思い出がありました、そしてなんといってもよく勉強しました。これからは毎年院生を絶やさない事がゼミの発展につながる事だと思います。と言っても私は何もしていませんが、これからもいっそうの御発展をお祈りしております。

## 卒業論文・修士論文一覧

---

### 昭和52年度

---

卒論	岩永	透	極性物質PVTの推算
卒論	石谷	秀也	極性物質の状態方程式
卒論	丸木	伸生	一般化15定数BWR式による 混合物のエンタルピの推算
卒論	本野	宗孝	一般化表による極性物質のPVTの推算
卒論	菊池 降矢	仁作 義美	Burnett法によるHeのPVTの測定
卒論	前田	昭明	重質パラフィン(C <sub>10</sub> ~C <sub>20</sub> ), CCl <sub>4</sub> および CS <sub>2</sub> を含む系の異種分子間相互作用パラメータm <sub>ij</sub>
卒論	淡路	悦生	極性物質を含む系の異種分子間相互作用 および混合則
卒論	永田 竹村	一男 憲二	可視光線照射による汚水再生装置の製作
卒論	吉田	茂喜	BWR型状態式における蒸気圧の推算

---

### 昭和53年度

---

卒論	近藤 浜口	元 直人	可視光線照射による汚水再生装置
卒論	阿部 田口	治彦 雄二	(C <sub>10</sub> ~C <sub>20</sub> )パラフィン, CS <sub>2</sub> , CCl <sub>4</sub> を 含む混合物の異種分子間相互作用
卒論	佐藤	幸博	極性物質の熱力学物性値の推算

---

### 昭和54年度

---

卒論	糸永 中出	晃 輝彦	可視光線照射によるm-クレゾールの分解
----	----------	---------	---------------------

---

### 昭和56年度

---

卒論	後藤	洋一	高圧気液平衡装置の製作
卒論	岡野	聡	Peng-Robinson状態式および 一般化BWR式による気液平衡計算

卒論 長谷川 衛 可視光線照射によるo-クレゾール光  
齊藤 篤 分解反応の解析

---

昭和57年度

---

卒論 長島 正博 可視光線および太陽光照射による  
宮本 秀幸 フェノール光分解反応の解析

卒論 石曾根 英高 極性物質状態方程式

---

昭和58年度

---

卒論 青木 勉 一般化15定数BWR状態式による純物質の  
エンタルピーの推算

卒論 上畑 一邦 コンピュータネットワークを利用した無極性  
物質からなる混合物の気液平衡計算

卒論 羽田 裕 極性物質の状態方程式

卒論 福田 浩 可視光線および太陽光照射によるフェノール  
田中 義昭 光反応分解

卒論 遠藤 哲夫 BWR状態式を用いた水素を含む系の熱力学的  
服部 宏志 物性値の計算

卒論 太田 和美 Burnett法による気体のPVTおよび  
鈴木 健 ビリアル係数測定装置の試作

卒論 福島 充 水素を含む系の相互作用パラメータの相関

---

昭和59年度

---

卒論 新井 努 Peng-Robinson状態式

卒論 木下 茂樹 拡張BWR状態方程式を用いる動作流体  
システムのシミュレーション

卒論 六岡 恒平 Burnett法による気体のPVT測定  
八幡 安博 ならびにN<sub>2</sub>を含む混合物の異種分子間相互  
作用パラメータ

卒論 島田 誠 極性物質の状態方程式  
田宮 孝一

卒論 山本 篤 BWR状態式による安定性と臨界点

卒論 石倉 芳人 可視光線による微量フェノールの光分解  
諸星 浩和 ----- 抑制効果 -----



卒論 福島 充 水素を含む系の相互作用パラメータの相関

---

昭和60年度

---

卒論 伊崎 健晴 可視光線による微量フェノールの光分解  
加藤 信治

卒論 伊藤 浩之 状態方程式による動作流体のHS線図と  
冷凍プロセスのシミュレーション

卒論 大久保 隆司 Burnett法による気体のPVT測定装置  
小田中 利成 の製作ならびに第2ビリアル係数の決定

卒論 梶ヶ谷 安弘 BWR状態方程式を用いた比熱

卒論 高井 享 BWR状態式の計算上の臨界点と蒸気圧計算

卒論 田中 一浩 水素を含む3成分系気液平衡

卒論 寺田 吉宏 蒸留塔と気液平衡

卒論 穂高 弘 アルコール類とフロン類の状態方程式

卒論 祝 葉一 無極性物質より成る2成分混合物の物性推算

卒論 平岡新太郎 一般化BWR状態方程式による混合物物性の計算

---

昭和61年度

---

修論 新井 努 Peng-Robinson状態式による  
気液平衡の計算

卒論 河村 光貴 高圧気液平衡装置の製作およびR12-R22  
系の気液平衡測定

卒論 水巻 宏樹 可視光線による微量フェノールの光分解装置

卒論 宮本 健次 Burnett法による気体のPVT測定装置  
の製作と第2ビリアル係数

卒論 稲尾 裕延 拡張BWR状態方程式による混合物物性の計算

卒論 川野 隆司 フロン類の状態方程式

卒論 中山 晃文 蒸留塔の設計

卒論 藤木 浩 輸送物性の推算

卒論 三留 勇人 逐次代入法による蒸気圧の計算

卒論 安原 忠司 アルコール類の状態方程式

---

## 住 所 録

昭和62年3月現在

氏 名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
西海 英雄	191	東京都日野市神明3-25-12	0425-83-5956	法政大学工学部	0423-81-5341内線207-245
佐藤 耕一	176	東京都練馬区氷川台4-18-12	03-933-5288	法政大学工学部	0423-81-5341内線245

## 昭和52年度 第1回ゼミ生

氏 名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
丸木 伸生	130	東京都墨田区菊川2-12-12	03-635-7636	武石印刷(株)	03-633-2806
本野 宗孝	890	鹿児島県鹿児島市草牟田2-32-69	0992-26-3229	鹿児島トヨペット	
菊池 仁作	359	埼玉県所沢市緑町2-17-70-7	0429-22-4340	コトブキ本社第2事業部	03-434-4301
岩永 透	354	埼玉県富士見市東みずほ台3-28-1 金子コーポ103号室	0423-64-9642		
前田 昭明	515-22	三重県一志郡嬉野町新屋庄51	05984-2-3777		
降矢 義美	270-11	千葉県我孫子市湖北台7-84-307	0471-87-1305	森尾電機	
淡路 悦生	274	千葉県船橋市三山5-5-8	0474-72-5053	三美食品販売	03-363-7111
永田 一男	458	愛知県名古屋市長区鳴海町神の倉 3-472	052-876-1923	愛知日産(株)	052-872-5006
竹村 憲二	874-01	大分県別府市上平田町10	0977-66-5380	三信工業設計部	0972-45-6721
石谷 秀也	876-11	大分県佐伯市持生1681	9722-7-7158		
吉田 茂喜	377-04	群馬県吾妻郡中之条町大塚210-1	0279-75-3983	中之条町役場水道課	0279-75-2111

## 昭和53年度

## 第2回ゼミ生

氏名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
近藤 元	492	愛知県稲沢市正明寺2-12-1	05338-6-3414	新東ブレータ(株)	0568-22-1141
阿部 治彦	305	茨城県筑波郡谷田部町二宮12-5 メゾンジュバルク	0298-51-8775	筑波メカニクス	02975-6-1522
浜口 直人	196	昭島市福島町3-14-24-203 千枝荘	0425-45-5826	エフシーシー	0424-71-2111
田口 巖二	314-02	茨城県鹿島郡神栖町神栖4-7-14松風荘	0299-92-5364	三島光産(株)	0299-92-5364
佐藤 幸博	190-12	西多摩郡滝徳町箱根崎527	0425-57-3986	武陽ガス	0425-51-1621

## 昭和54年度

## 第3回ゼミ生 (海外留学のため指導期間はわずかであった。芳名のみ記す)

氏名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
伊沢 良弘 藤村 富美男 渡辺 操 青木 宏 糸永 晃 大浦 忍 中出 輝彦 棚 康宏 山本 智弘					

## 昭和56年度

## 第4回ゼミ生

氏名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
後藤 洋一	229	神奈川県相模原市上溝1-7-1	0427-61-8250	オーディオ・テクニカ 技術部技術科	0427-29-5111
岡野 聡	722-23	広島県因島市田熊町中区1443-2 鳥取県倉吉市福守町316	08452-2-3542 0858-28-4991	日本国土開発	
長谷川 衛	176	東京都練馬区田柄4-35-20	03-938-8751	大日本インキ化学工業(株) 大日本インキ機械技術センター	03-647-5411
斎藤 翼	246	神奈川県横浜市瀬谷区相沢4-6-9	045-301-1819	日本ライント 開発部技術G	0462-62-1125

## 昭和57年度

## 第5回ゼミ生

氏名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
鹿内 正善	152	東京都目黒区南1-3-8	03-724-2361	日本電気株式会社情報処理 第一公共システム事業部	03-454-9111 内5491
長島 正博	270-11	千葉県我孫子市つくし野341-169 サブマンション202号		トソー株式会社 第2設計室	029752-2111
浜村 昌平	349-02	埼玉県南埼玉郡白岡町西5-10-4	0480-92-8743	東洋電気通信工業株式会社	03-434-5111
宮本 秀幸	852	長崎県長崎市石神町18-6	0958-44-6586	日産自工	
石曾根 英高	390	長野県松本市大手2-10-16	0263-33-6602	三協精機	

昭和58年度

第6回ゼミ生

氏名	〒	住所	TEL	勤務先	T E L
青木 勉	230	横浜市鶴見区馬場4-2-7	045-572-0312	日本ビクター(株) オーディオ事業部	0462-74-2121内2292
上畑 一邦	386	長野県上田市秋和1081青雲寮		官野鉄工所	
羽田 裕	184	小金井市東町1-38-1 小松利彦方	0423-84-9699	日本電気通信システム(株) 設計部	03-456-5111-4059
福田 浩	250	小田原市本町3-1-15	0465-22-7749	日立電子エンジニア(株)	0465-81-1011
榎本 照夫	210	川崎市幸区小向町3-14	044-544-5009	赤井電機(株)	
遠藤 哲夫	281	千葉市千種町352-44	0472-57-4428	日本ケーブル 本社工場	0474-51-7111
太田 和美	446	愛知県安城市安城町官前73	0566-75-3702	豊田工機	
鈴木 健	167	杉並区萩窪5-3-2		福田モーター商会	03-582-1683
田中 義昭	980	仙台市向山1-17-18 フジアパート	02974-8-1361	前川製作所	
服部 宏志	569	高槻市古曾部町4-9-17	0726-82-8849	石田衡器製作所 滋賀工場	0775-53-4141

昭和61年度 第9回ゼミ生

氏名	〒	住所	TEL	勤務先	T E L
船尾 裕延	726	広島県府中市高木町270-1	0847-45-6356	学部4年	
	184	小金井市東町4-39-15 太平荘1-5	0423-85-5078		
川野 隆司	243	神奈川県厚木市戸室1010-19	0462-22-1076	学部4年	
		三厘市新川6-8-10 さわらび荘101号室	0422-43-9360		
河村 光貴	421-03	静岡県榛原郡吉田町片岡2980	0548-32-2778	学部4年	
	185	国分寺市東元町1-14-8 南和荘2-7号室	0423-24-7745		
中山 晃文	180	東京都武蔵野市境南町5-13-19	0422-31-7927	学部4年	
	680	鳥取県鳥取市立川町1-99-1	0857-23-7039		
藤木 浩	259-11	神奈川県伊勢原市沼目3-23-16	0463-93-0397	学部4年	
水巻 宏樹	167	杉並区西荻北4-6-19 小机寮202	03-395-0713	学部4年	
	933	富山県高岡市横田町1-3-36	0766-22-9071		
三留 勇人	143	大田区中央7-5-7	03-755-1782	学部4年	
官本 健次	154	世田谷区池尻3-1-1-305	03-411-3874	学部4年	
安原 忠司	184	小金井市東町1-37-23 松田荘	0423-84-7749	学部4年	
	731-51	広島県広島市佐伯区美の里1-11-48-18	0829-22-7231		

昭和59年度

第7回ゼミ生

氏名	〒	住所	TEL	勤務先	T E L
新井 勉	359	埼玉県所沢市北秋津336	0429-92-1990	大学院M2	
木下 茂樹	384-01	長野県佐久市大字中込577-1 クウニムでや102号室	0267-63-2634	前川製作所	
六圓 恒平	245	横浜市東区中田町1063-2	045-802-1055	武蔵エンジニアリング(株) 設計部	03-541-4621
島田 誠	185	国分寺市元町2-13-41 コーポすみれ		日立青梅電子	
田宮 孝一	175	板橋区高島平2-28-1-202	03-936-8256	東電工業(株)技術部検査課	
山本 篤	339	岩槻市宮町2-13-32	0487-56-6075	前川製作所守屋工場	02974-8-1361
八幡 安博	999-13	山形県西置賜郡小国町大字岩井沢841-1		ニューロング製袋機械	
石倉 芳人	134	江戸川区中葛西5-16-3誠和寮	03-689-1815	日本ケーブル本社工場	0474-51-7111
福島 充	254	神奈川県平塚市田村5964-2三菱ガス化学 社宅403号	0463-54-0644	日本スチレンペーパー(株) 平塚工場工務課	
諸星 浩和	254	神奈川県平塚市東八幡2-7-10	0463-21-1776	徳寿工作所 営業本部 営業技術部	0463-32-1840

昭和60年度 第8回ゼミ生

氏名	〒	住 所	TEL	勤 務 先	T E L
伊崎 健晴	154	東京都世田谷区弦巻1-4-4	03-421-0371	大学院M1	
伊藤 浩之		千葉県市川市市川南1-10-18	0473-23-4645	ロジテック株式会社 電子機器開発グループ	03-257-6361
大久保 隆司	177	東京都練馬区石神井町6-10-10 小林方	03-996-5998		
	368	埼玉県秩父市桜木町14-18	0494-22-4839		
小田中 利成	330	埼玉県大宮市大和田町1-1261	0486-83-1580	関東精工株式会社 ユニット設計課	0486-52-5131
梶ヶ谷 安弘	259-11	神奈川県伊勢原市桜台2-4-29	0463-95-2545	大学院M1	
加藤 信治	399-43	長野県上伊那郡宮田村3167 岳峰寮	026585-2124	日本発条株式会社	
高井 亨	321-01	栃木県宇都宮市雀の宮3-371-13	0286-54-1433	日本ラジエーター株式会社 群馬工場第2技術課	
田中 一浩	181	三鷹市野崎120 第11自啓寮		日本無線株式会社	0422-45-9166
寺田 吉宏	446	愛知県安城市住吉町3-1-42		ワシノ工機	
平岡 新太郎	302-01	茨城県北相馬郡守谷町字大久保		前川製作所守谷工場	02974-52-2700
穂高 弘	392	長野県諏訪市小和田6-13	0266-57-0885	チノン株式会社 カメラ事業部技術課	0266-52-2700
祝 兼一	290-01	千葉県市原市瀬又1005-72	0436-52-0717		